特別
イ4
3163
1(11)

やまとうたこゝろのことのはもろ〳〵の神代より
いまにいたるまてのことは名におふ代々のや
まとうたのまことにいたりのすがた
又ハ延喜の聖代ハ古今集を
えらはれ天暦の御時ハ後
撰集をえらはれ絵ひ白河の院ハ後
拾遺を勅撰ありて堀河の院の御代ハ
ちかの前をたまはりて絵ハ金葉
さこと御代の風俗をえらはれ
もろ〳〵の人の名をのこせり

をさまりていにしへより今にいたるまて
のこしてたえぬことかみよりつたはる
ハ世に和国にまよひ給ふ人
二条もこの新古今
いもうとの解脱上人
みことの伝教大師ハ我立仙
ときもとのことはりのさまをも
此道をいはむやそのかみ
集をえらひたまふ
あまりのことなりけるかなしさのうた

むかしも絵あはせと名つけしとしこわ
よしきのかはきは摂政殿の庭
の其色ちらとも見えしのはへおさ柳とみの
おもきさ絵にはやゝ山かきさこのかゝる地
人のちとはあちこちの若葉かすかなる
よきにむへおとこのいとしめとるゝめ絵ふ
おな猫ともきもしおのねかてよみちはる
まわ三のえのもの梅りよきんもわに
くはあきつのよねはん今のつゝ鉢
鳴のほつまてもとしい花のつきは消ぬく

みまへのものもかゝれつつるふ
まつゝまつきとゞく弓侍らふた
くひまそゝにとにまれわまにのきと
六花のしくにくとみなまうらは
し春の花の初梅の月とのゝく
思ひもとのへいまとうしこのうちとこかと
すしなは晴まいと竹乃鮮きてまさ
としはへなは晴よいや唐の方こ
と蘭ともろる飯しき鳴のへちし
きこのまにすくつまてこ蘭東の心つゝ住

まことにかも小野の宮の詞花集もわ
もさることにふしとの世の道をこの集
とも申しみえとせ花はもとよりきらめ
むかしの時の撰者につねなる人の心を
もえあらそん事はいはそののち拾
遺集よりこのかたのことをいはんに綺
のことは暦のころよりいはこと文治のころ
なりけるはまさにのやまとうたを
えらはれたる人々あまた撰せられと毎年あ
まかりの清時にいはこのことしえ

二ちうあまたはせしは世に十續あまた
七代まるもちいなはよりぬるいよりこる
るしをもとめて人の心をもってとも
いろいろしもつもたため此集をとも
拾て千載和歌の集といふの後拾
遺集の後ならぬもの勅撰しなきまま
家撰なる所金葉詞花の二の集
あつまさつ撰ともし新勅撰のことをいはん
のをもいはこしてとれしなれ
ほし大かたの今の世ゝにかたそのをとき

あくへかるへし柳桜錦の道をたまふ

なかることをしゆへにきりつゝ春日のもと流

にしきの文のちもとしまふにもとに若の

花鶯の声の梅はなれは流をとこ流

かしもあるへきのふの四十あまり七

ちのまなこをいはれしてつかに柿

こ宿をさ玄宗にはまゐりていりて恩

紫あつゆのあまり桜へはみえもあまわ

一ちもとるよりかへつりむつふしのいほ

川も雲の庵にをしのに梅園浮雲

とみことのとものゐよいつまもおとなしき

とかくしておもへるふうつ三つはあ稚

ときに酒をこにいよ稚はいよくうるさ

あふれはいはくたのさき扨は山大和哥

のみちりまふもあまりに寿花林院

菊娘のよし此本院菜錦は濃く

又玄聲くさわとのこかもゑまと山

のあきのの梅のもと名をかとこは事ある

なかはえのあとにつき梅あはいとに

かはつとさうへあるまうの稚とこのはこのむれ

とこしなへにあれとも河いまにもちゐたるやとく
みかとのためにいつのまにか万葉の
ことはをもとゝしてえらひよまれたるは
えらひをもとはしめていとをしく勅して
千歌二十巻をあつめて二十巻とし給ひ、
いにしへよりは勅をうけたまはりて集を
えらふ事あるはいよいよその道たへす安から
心はまことにあはれなりし之道
をきもちいぬるのはなくとも保
ものいはすとも集をえらふ事ありに松か

よろつよはなれしこれの歌にさためおく
なかにものこゝろをえらへる人ありけるなん
そのわか式と宇治山の僧喜撰に
いひのこせるをあつめてきこしめすのまゝ
をとうたまてはしるしおかれて大和哥の式たく
きよまりたる式をたてゝ集をえらひ給ひ
かの心のしの説をはしめわかとけなきに
あはれのうへに和歌の道の人なるかと
まことにこそ七ちの人のかならす心えしは我
法の道にながれくるまことにかはらぬ六千

小冊子あまねくわたりて秘めおかれしを世にも漏
らし浦々の人も草の庵の枕をも見
よきまなぶべき例となりもせば
絵の如なくし集めてここのをし
歌もおさへぬきて住吉の松の風
しるく傳へまほしき筆の流をまく
ちらしにし千とせのためしをそこに
よろしの星霜をへぬることや文治
のころの播磨長官の手跡とぞ
の小野のみちかぜやかつえられん

あまりての隠

千載和歌集巻第一

春歌上

春たつ日よみ侍りける　源俊頼朝臣

はるのくるあしたのはらを見わたせはかすみもけふそたちはしめける

堀河院御時百首歌たてまつりける時はるたつ心をよめる　中納言国信

三むろ山たにゝやはるの立ぬらん雪のした水いはたゝくなり

百首歌たてまつりける時はるのはしめのうたとてよめる　待賢門院堀河

雪ふかきいはのかけみちあとたゆるよしのゝ里も春はきにけり

堀河院御時百首歌たてまつりける時残雪の心をよめる　大納言経信

道たゆといとひしものを山さとにきゆるはをしきこその雪かな

康和二年内裏後宮の歌合によめる　藤原顕季朝臣

ちとせよりの…

春ことに雪かとのみやみえわたる
谷かせにとくる氷のひまことに
後冷泉院御時皇后宮歌合に
よみ侍ける　大納言隆国
山里のいふへのこゝろやしられけむ
うくひすのこゑもはるかにきこゆなる
法性寺入道前太政大臣内大臣に侍
ける時十首歌人々によませ侍けるに
よめる　源俊頼朝臣
ふるさとのとちむろの花をたつねつゝ
やまかせもこゝろのまゝにふかなゝむ
右大臣に侍ける時家の歌合に
侍けるに霞の心をよめる
権中納言大下
のきはみのしのふをみわたせは
人しれぬ山のかすみにたちぬらむ
堀河院御時百首歌奉ける
時霞の心をよめる
前中納言匡房
高砂のをのへの山のかすみもたちぬらむ

つきもみのうちもとちりなましかは
霞のうちにやとまるらん
顕輔
あさみとりいとよりかけてしらつゆを
ゆきとまふかとのこゝろをいてゝ
左京大夫顕輔
あをやきのいとはこゝろにまかせつゝ
つゆのやとりやこれやしるらん
あをやきもいろはまさりて
子日の小松
待賢門院堀川
としことにまつやまつらむときはなる
いつかはいつも
前中納言匡房女房のもとに正月七日
中納言女房のもとに
ふるさとのつゆしけきかな
治部卿通俊
こやとりのしらつゆの
かすかのゝ
権中納言
ちよのかすとも

源俊頼朝臣

春日野の雪をわかなにつみそへて
けふさへ袖のしほれぬる哉

睦月の廿日比雪ふりけるに
家の梅を折て俊頼朝臣に
つかはしける

権中納言俊忠

ことしより花さく梅の立枝にて
のこれる雪の色そまさる

返し

源俊頼朝臣

梅の枝にかゝるもそのしるしなる
さそはゝや人のとへとゆかん

梅の花雪のかみにまかへつゝ
さくかいなかれ

右京大夫顕輔

むかしにもかはらぬ雪のうちにして
おちかたにちるも花のとをみる

永保二年十二月后の宮にて梅
花久薫といふ題を人々よみけるに

大宰前大政大臣

のかる香のたよりもみえむ人のたむかの哉

なきける風やのとけきみよのはる

堀河院御時百首歌たてまつりける時

梅花のうたとてよめる

大納言師頼

いまよりは梅さくやとは心せむ
またぬにきます人もありけり

前中納言匡房

ま[illegible]のへ[illegible]の雨
[illegible]のよの[illegible]春の月
[illegible]の春

大炊御門右大臣

わかやとの[illegible]
[illegible]

和泉式部

梅の香を[illegible]
や[illegible]

前東宮[illegible]

[illegible]風や[illegible]
[illegible]地の[illegible]

皇太后宮大夫俊成

春の夜は軒端の梅をもる月の
ひかりもかほるここちこそすれ
百首哥めしける時梅の歌とて
よませ給うける　崇徳院御製
あちのよくは咲まて風はさそふとも香に
春ことに思ひめと[illegible]の雨
梅花遠薫といへる心をよめる
源俊頼朝臣
梅の香はおのかかきねをあくかれて
まやのあたりにひまもとむなり
題しらす　右大臣
むめの香に錦[illegible]
くを一枝はかくしもの哉
仁和寺二品法親王
世の中の[illegible]花よ[illegible]の
[illegible]
權大納言宗家
風わたる[illegible]
[illegible]
[illegible]紅梅の枝に

のいたらんと申けるをきゝて年の月
かの里に花をもてあそひけるおりしも柳は結
けるに皇太后宮大夫俊成のもとにつかはし
ける
大納言定房
もろともによわたるきぬ風とともにむかしのあき
わくらはにとはれしひとは松人
堀河院御時百首歌たてまつりける
時まち春のうくひすといふ心
前中納言匡房
よもの山に木のめ春雨ふりぬれは
かそいろはとや花のたのまむ
左衛門佐基俊
はるさめのふりそめしよりあをやきの
いとのみとりそ色まさりける
題しらす
和泉式部
つれつれと山にかすめる梅か香は
いつれのもとにや人のとふらん
堀河院御時百首歌たてまつりける時
藤原基俊
みよしのゝやまのしたかせのこしてむ

もゝとのみおもひしる人もなし
岩間にはまたこほりのとけやらてわかみ
春雨の音はまたきこえ
前大僧都[illegible]
見しゆめのあとをたつねてわけ行は
みちのへの[illegible]
滝の[illegible]
とそおもふ
源俊頼朝臣
まつかせの秋はいたのまもるへき
嶺の雲[illegible]

帰雁のやまとより見えたちかへる
左近中将雅経
みよしのゝ秋はいの深める更て
むかしのよをつゝみ[illegible]
[illegible]
従三位頼政
[illegible]海の
[illegible]
祝部宿祢成仲
[illegible]雲井ともしるらむ
[illegible]

崇徳院に百首のうたたてまつりける時
花の歌とてよめる
藤原季通朝臣
まちいでゝ花のさかりはしらねとも
あくまてもかひなきものになかめける
百首のうためしける時春のうたとて
よませ給ける
崇徳院御製
おしめとも花もちりなは思ひのこさし
桜あかのまにまちりしかは
待賢門院堀河
ちるよ花をしむにとまる物ならは
よしの山あらしにしをれとなにか
白河の院の御時いさりあとに
よめりけるおほえてかへる
ふ
京極前太政大臣
山さくらたなひくくもにまかひつゝ
木のまよりちりかふなるはしら雲の
鳥羽院位おりさせ給ひて後
河のよるまて花見御幸
けふ白河の花見ての

花園左大臣

春きては花見のこゝろとなれるか
のとのてしもあふしにのかれ

法太政大臣

よろつよを花も色のためやらふ宮居
むかしにかへるとしそしらるゝ

近衛殿にわたらせ給へりけるに
はつ日上達部山花といふ心をよ
ませ給ひける

崇徳院御製

たつたつ山花もいろそふにほひかな

まかりてかへるにみれは山の梢

法性寺入道前太政大臣

みよしのゝ花のさかりをけふみれは
こしの白ねに春風そふく

寛治八年前太政大臣の高陽院の家
の歌合に桜の歌とてよめる

中納言の女

山桜よしのゝ山をみわたせは
風をはよそにはらふなりけり

前参議経盛

花橘へりにつゝしぬ山くちなしのなれ
みゝらくいまつりのにほふなつかしきねど
京極の老翁よりて十種伝書へ
なる時白河院へ[illegible]すゝきをも給ふ
文の日名つくしまてを多くうたはん
侍りける

京極摂政前太政大臣

さるほどもおもひのまつよりあはれしと
きみのみかふるさとやたれ[illegible]まらせん

後二条関白内大臣

毎年かつまいりけるのにほひをかへる[illegible]

[illegible]へもおとはたえにけり 秋

右衛門督基忠

咲ぬればちるは花のあたりまいりてなむ
なをさそふや屋とみえ松にかぜ[illegible]
毎朝見るとしるなる心かとも侍るへ
ふ

中院右大臣

くるまもとくるまの新枕
いはのたもとにやゝあけにけり
東山にて雨見侍りける日よみ侍りける

右大臣

手まにたえいとふかんやなかしきの
ちしめくるとくこのよゐをかな
大宰三の人のよを修をはかなき
のなつしきみ修をくな
左大臣雅定
君来ぬ人のあはれとをしくれ
いくしもしにもきくらん
崇徳院 百首歌
のなしとそよきる
わきかやたのかの山のちもえも
左京大夫顕輔

玄井のよつかみやちよとふ母と
前参議教長
山桜ちりみこのふのきもかなは
つまものしのかきしまふ
藤原清輔朝臣
神のおのこころの山いまさきて
華のしのゆかのけらみつる
東思ふもとのこのつれを
仁和寺後入道法親王
東もよしのもこのふいもかもいやみ

あはやみえしはなのつゝらん

尋山花といへる心をよみ侍りける

宗家

権大納言

さくらさくやとしてぞ山はたつね侍

花をたゝのみのしほりにそありける

白雲と見えしはさくらの盛りかな

源俊頼朝臣

さくらさくねの人ならは山さくら

ちるとたにみえぬまぼろし

花のおとをそらに

円位法師

なかめつゝよしの山ふもとにまよふいはねのまゝにわけ入り

賀茂社歌合とて人々よみ侍りける

春暮の心をよめる

右京大夫隆信朝臣

ともすれば花もとまらぬ春のとをしとや

なにとてもわかるゝ春のうさをのみ

藤原公衡朝臣

世盛まちもの山路小安殿の桜を

春はなほ〔かはらぬ〕いろのあやめ

春日社歌合とて人々よみ侍
りける時よめる　　顕昭法師

吉野河のせとはしもとも〔いとゝ〕
あらはれてやいはねの波

故郷花といへる心をよみ侍ける

よみ人しらず

さゝなみやしかの都はあれにしを
むかしなからの山さくらかな

日吉社の歌合とて人々によみ侍ける

〔よみ侍ける〕　　祝部宿祢成仲

さゝなみやしかのからさきの日より
むかしの人のみえもせぬ哉

暮春のこゝろをよめる

賀茂重保

こそのはるのちる桜をみてもなほ
こゝろよりこそをしみなれ

俊恵法師

もとめてもくれゆく春のとまりかな
山ふかみ花をとゝめてくれゆく

前大納言為兼

よし野山花のさかりにたちかへり
たゝねまもなくかほる山かせ

毎春花下といふことをよめる

源仲正

春ことに花のもとにてなかむれは山桜
ちりもせてひかりとゝまる

百首歌たてまつりける時よめる

待賢門院堀河

さくら花さくとみえしは雲なれや
しらくものこるみねのさくら

月の色にみかくしたる
上西門院兵衛

ちりのこる光もしつむ月か雲の
まつのおくにみえぬ

哥合侍ける時よめる

としのよるかな

太宰大弐重家

もとのすむさとの花のなかめこそ
雲井よりふる嵐の

後京極摂政

もくゝ峰やみしかの山の若葉つゝき
かをとやや人かり花のさくらの里を
まちまつ人をよそのまゝせ行て待
花のちりとそ人あかす

皇太后宮大夫俊成

みよし野の花のさかりをけふ見れは
こしのしらねに春風そ吹

千載和歌集巻第二

春歌下

鳥羽殿におはしましける時常に〳〵
人々あまたのこともつかうまつりけるに

よませ給ふける

白河院御製

咲しよりちりはつるまて見しほとに
むかしのかけもつもかすわかる

久しくまかりて侍るに　前太政大臣

殿上人まゐりて池上花といへる
心をよませられけるに

源俊頼朝臣

池水のみきはならすは桜花
かけをもなみにおられましやは

山寺の花のさかりにまかりて侍ける

大宮前太政大臣

しら雲とみえつるものをさくらはな
ちるはゝ山も花なりけり

百首うたの中に花の歌
とてよめる

藤原季通朝臣

芳野山菊ハかつハよもつゆなけれ
たえぬくのこゝろ常のかし雲
寛治八年前太政大臣高陽院の
家の歌合に桜をよみ侍ける
内侍周防
しらくもとみえつる花をしくなは
ちるまてもしかし桜のまなし
法性寺入道前太政大臣
の内大臣と申ける時人のもとへ
の歌にまかりて白河
殿よとまかりもとに人の侍る

くるにけるみゆるわけかは
大納言長家
まき田にかたるかもみとも
みえ新しきの松は
藤原清さへくのもとに
藤原清輔朝臣
上東門院中将
ねめハかしまくハ桜のもと
にて山のかし田の所
藤原清時のまゐりけるとき
時桜をよミ侍ける

大納言匡房

山さくらさきそめしよりひさかたの
ちるをもとてやふかみ首らん

藤原仲実朝臣

花のちるこのもとかけにたちよれは
くれぬまてくもの花をのこすかな

藤原基俊

よそにても毎にちりやまたくも山路
のきくゝのみおくとたよりつゝ

崇徳院御時十五首歌たてまつ
りける時花の歌とてよみ侍りける

大炊御門右大臣

みよしのゝ山の桜ちりぬれは
ちるはいつまて雲井まてこそなかれけれ

百首歌よみ侍りける時花の歌とて
よめる

前参議親隆

まよはさて雲の山にゝほひはか
宮このうちのちるをのこしけり
花のちるとぞみえわけつ

左近中将公朝

櫻さくひらの山風ふくまゝに
はなになりゆくしかのうらなみ

花留客　とふ人をまたるゝ花のやとり哉
右近大将実房

もろ人のまちはいかなるよそにしも
帰る人とゝめぬ花のならひをそしる

落花　ものゝ名をとめてもみる花の中の
権大納言実国

あかなくに袖につゝめるはなのかを
うれしと思ふまてあはれなるかな

谷の中のたちまちの袖の色ともに
いつまてかもとめて

権中納言通親
大納言

まくらにちりまかふ花を
いはそにちるをいかにせよとか
ものゝふもたへよる花

俊恵法師

みよし野の山のしつくのあらしや
桜ちりつもる花のしら雪

源有房

ひとゝせにふたゝひちらぬ山桜
風まちえてやはなもちるらむ
花園院
ちる花もをしむに人はかはらねと
あかぬ色そとしの光よそにみる
覚盛法師
あさ雨にぬれてちるらむ花の色や
つゆけにしほれ桜かりける
源仲綱
山桜ちるまふかき谷のそこまても
さらぬ人にはあはれなりけり
華のちるをとゝむる人はなけれとも
道命法師
けふ桜を
今日よりはまたきつるへのまきれにも
めはまへにみえしもしつるかな
池の桜のちるを見てよみ侍る
能因法師
桜ちる水のおもにはせきとむる
ものさへつみへのまくれ
花浮澗水といへる心をよみ侍りける

花園左大臣

山風のさくらちらすもおとすなりけりよし
いのちとも見えしまつらもしらすかり
山ざくら花もとにしらぬかもとゝめなむ

大納言伊実

菊の夕露もろきまつのはなちる山風の
くもゐにしるらむ庭に夕ぐれのつま(?)にゝ

左近中将 宇禰 なる ものともしらる

藤原基俊

あきはいつはなもなくへしとしのはるまつ

ちるまをやことゝいふへき よしのやま
くもゐのさくらまつはみえけれ
宮こにもちりのまかへしはる（?）いさなみ

源義家朝臣

ふく風をなこその関とおもへとも
みちもせにちる山さくらかな

もとのゝ水無瀬山のはに残雪をまつ
待まけるひ僧都範誉のもとに
こよひの月のまことにくもりなき

源仲正

かきくらす外山のおくの桜
花のしら雲に雪のとくらん

百首歌読侍りける時春の心を

とよめる　　　　前参議親隆

あさみ山ひのくまかはの月をもる

ちりまかふこゝろもしらすわか身なれ

右京大夫道雅

あしひきの山のはしらぬ花なれと
ちりもはてなむつもるへきかな

堀河院御時の百首のうちに

名所をよめる　　　　前中納言匡房

おもふこともなくやさくらをみつるかな
きのふのけふはいかにかはらむ

月ころの時雨の菫菜をよめる

権中納言国信

こよひねてつみてかへらむすみれ草
をのゝしはゝら露しけくとも

修理大夫顕季

あさひさすいほの小野のつはな達
さわらひもいつのまにかはをれるかな

寿永二年后の宮の歌合に遂花
よめる　源雅国朝臣
たちよ[illegible]いる[illegible]庭のつゆもかけずも
まだきのちるみちはつれなくぞ吹く
播磨清晴の百首の歌に山吹を
よみ侍る　大中臣親宣朝臣
春ふかみ井手の川水かげそへて
いくへかみえんやまぶきの花　藤原基俊
山吹の花さかりなるいづくとか[illegible]わたりの

井手の里人[illegible]
播磨清晴の[illegible]によみ侍る
あやまとさまにめて[illegible]
まつみとそ待つわかれ[illegible]
二条太皇太后宮肥後
九重にうつし植ゑて[illegible]
井手の川[illegible]のうつろふ[illegible]
水邊山吹といふ事をよめる
藤原範綱
よしの河きしの山吹咲きにけり[illegible]

すこまいかつもみしもつ人ゆ侍ら
藤原雅経
佐ほすのいつまさそめ何やまふきの
華のさかりくみてのゝ水
山吹をとゝめよ　惟宗広言
をのそれいはいまきもそとゝめてえつきに
花をそめよりくせいやもあきの色
一重さへひらけるはりける晴る山路
とさよのる　藤原清輔朝臣
山吹の花のつまとはきかぬとも

うつりふかくつまよふくいかなるら
宇治前右大臣の家に歌合し侍ける
にて暮春款冬をよみ侍る
康資王母
いつるよりまつらむふかきさしなの款冬
まちかねてまつりとのすまもへてきこえ
永承四年内裏歌合に款冬
もとよりて侍りけり　侍
中納言俊家
九重にたちかさなれる八重は款冬

こほりしきかへの池の雲ゐにこゑたてゝ

百首哥たてまつりける時よみ侍
りける

大炊御門右大臣

としふれとかはらぬ松を頼てや
つるもすみける世々の池水

三月つこもり比白河殿にて御
たゝ人の筆あまたありけるに更衣

二日とて三月にかへらん人のかたことしつの
まきちらすわけるに次の日よりあまたはなさけける

二条院御製

千世もへむ春にやとも思やおもひ
あさくはのかきまよはしてしらくもて

おもひ綿かけつる暮の空を
よそにたのまん人のゆくゑ

崇徳院御製

むかしふるさとの春のなこりにかへる
まちわひしまよふとも人しらん

三月のつこもりの日よめる

中務卿具平親王

なをおしむ春しもいかにくれぬらんと

しのひるゝまてはなくなくしるしかな

式子内親王

ちるもまた思ひやるへき方そなき
春のよの月の桜か花の雲
みよしのゝたかねのはなの明ほのゝ
心もとなく侍りける

大納言隆季

花はちりまたいとまなき物を
おしむかたにはつきそ侍りける

三月尽の心をよみ侍りける

久我内大臣

入日さす山のはさへそうらめしき
くれゆくはるのゆくへしらねは

いたつらにすくる我身の春の
おしあはれ春の日のくるゝのを

藤原興風

源仲隠

ちりぬれはおもひし花のなこりさへ
春の日のくるゝはかなきものは

藤原経家朝臣

ゆく方とまるのは春はしらねとも
おしむなる心のとまりをしるらん
行路三月尽といふこゝろを
よみ侍ける
雅賢法師
もろともにおしむ春のわかれ路の
つれなくもとまらぬ春のわかれかな
三月尽日皇太后宮大夫俊
成のもとへつかはしける
に
法橋静賢
暮ぬとも春のわかれのはてはしらなん
おしむともやまをは春のとまりなん
同三月尽よみ侍けるに
権大僧都範玄
きのふまて春のひかりをたのみにし
ちりぬる秋のこゝろをそしる
海路三月尽といふ心をよみ侍
に
前大僧正覚忠
おしめともとまらぬ春のわかれ路に
波とゝもにやけふはゆくらん

崇徳院に百首哥たてまつりける
時よみ侍ける花の哥とてよめる

左中納言通房

つねよりもへゝみちをとにほのめ
いはねかよひかよしのしねは

前斎宮河内

ゐそちゝてな菓のちりすもし
かゝるへし
あはれし

こゝろはとへ
梅かとおもふよ

千載和歌集巻第三

夏歌

崇徳院に百首歌たてまつりける時更衣の心をよみ侍りける

権大納言実房

なつころも花の袂をぬきかへて
春のかたみもとまらさりけり

藤原基俊

しら雲のたなひく蟬のたちもかくれ
たゝとゝろ夏は立まつ有かな

崇徳院に百首歌たてまつりける時
夏の始の歌とてよめる

藤原実清朝臣

あのえ根くまつの経はいつへ
人やうつおとひいしゆくの紋

卯花をよめる

左京大夫顕輔

もしらくりよきつゝの卯の花もゆ
このゆ浪月のかゝへらる秋

若葉さす卯花もとゝ心よの侍覧

右近大将実房

かな

夕月夜さのめく影らの光も涙
さくらあさつまいとやへわかれ
卯花ともみえ侍るかな
仁和寺後入道法親王
玉にぬくとをるにかけのうへにめくる
やほのうちにけるむかしの有明の
白河院鳥羽殿におはしましける比
ともいひ侍りけるにこのせとよ
めかゝ
藤原季通朝臣
みて過る人とゞまるは卯の
さかるゝやしのゝかきね
右近卯花といふ事をよめる
賀茂政平
卯の花のよるもみえける山里は
みちをはわかれけるしら雪
卯花先開といふことをよめる
藤原親隆朝臣
この卯の花とのとやおもはし
さみたれのふるやの小ゝのかきねには
山里はよのまにふる雪のわかれあさみ

侍りけるに野若菜をよみ侍りける
前京之通
蝶よこてしつ小町の小野の若菜
むまくりつまちきれにりつまの
落河陸は時百名えへてまわれれん
小町姿をとよみ侍
西ちつれ草履
あふひ草て日は神にいつの
つけちたるといりつちゃくと
賀茂のいつまうまでて侍姿のみ

あひの日人はあつるをとまて侍
まろ子よりてまけのにの侍る
求雨歌道
神よかひのしとにはちりら
あふつの
ちおかつのてしも年の神に小あ
仁和寺の谷のしとかへて新公の
ひさらふ人侍りけるを時よみける
撫宮庭公道
新公さつゑへよ本ちの花を
とあらし頃を侍のいらの舟

修理大夫顕季家歌合し侍けるに
郭公をよめる　左京大夫顕輔
ふる鐘ときくやほとゝきす
まつにうちあはぬはつ声に
鳴なかぬよとはなけれは
　　　　　　賀茂重保
ほとゝきすしのふるころは山ひこの
こたふる声もほのかにそする
皇太后宮大夫俊成
ほとゝきす思ひもかけぬ春なけは

みやしまい待人こゝろのやみをまつ
さつきやみたへしめとなくほとゝきす
聞さてやとおもへは道命法師
まつきみはあかつきのかねたになく
康資王母
つゝきもなくへわけなる
郭公まつもよしやあかつき
待かたきかなし鳴へき
郭公まつ夜もありきの鳴つく
ちらしよりまてはてかつ
覚盛法師

まちわびて人まとはゞやほとゝぎすまだ
きゝもしつらむやまのはの月

宗良親王みやこにまかりける時
よみける

前参議教長

たづねつる山ほとゝぎすなきもせで
人だにまたぬ夜半の一声

遠夕時鳥といふことをよみ侍り
ける

権大納言実家

おもひやる方もはるかに子規
雲のいく重のほかに鳴らん

夜天蜀魂といふことをよみ侍り
ける

仁和寺法親王守覚

誰が声にまたもなきわたるほとゝぎす
枕にのこる雲の一声

郭公の歌とてよみ侍ける

従三位頼政

一声はさやかになきてほとゝぎす
雲ぢはるかにとほざかるなり

右大臣に侍りける時家に百首歌よ
ませ侍りける時鳥の歌とてよめる

侍りけるに

摂政右大臣

おなじことたえまもなくはなきもせぬ郭公
松のまきくらもうつろふ物を

暁聞郭公といへる心をよみ
侍りけるに

右のおほいまうちぎみ

ほとゝぎすなきつるかたをながむれば
たゝ有明の月ぞのこれる

子規のうたとてよみ侍ける

権大納言実国

名におはゞくるもあかなるのあまにはまち
まつのうちにしやとゝまれや

権大納言実家

夕月夜いるさの山のこかくれに
ほのかになのる郭公かな

前大僧正覚忠

郭公きゝつるかたの一声は
よもすがらまつもかひなかりけり

摂政右大臣の時の家の歌合に暁郭公
をよめる

皇太后宮大夫俊成

過ぬるか夜半のねざめの郭公
こゑはまくらにある心ちして

鐘いまさくりよ思ふるなころし寐
右大臣実房中将に侍りける時十首
うたよませ侍りけるによめる
定円法師
夜をこそ待わひぬれはつれなくて郭公
いつもよりもそらそのふるしかはをしき
子規の心をよみ侍りける
権中納言長方
あけぬとていまそつくつる時鳥
ほのかなるよとのあふ月のまたしらぬ里

久我内大臣のもとにて郭公昌蒲
といふことをよめる
権中納言雅頼
あかなくにほとゝきすかやめくる
うきねのみなかれても声をのみぞ
昌蒲のことをよみ侍りけるに
桜町前右大臣
五月雨よりあやめくさしけみの草
わかまち岸のまへ波もよりしめ
内大臣

杉ちる〳〵みちもきかなく　新六
移ろやなやかりてかくれ
後朱雀院御時長久二年着
一品の宮の歌合に長柄橋を
よみ侍る　枇杷殿皇太后宮大弐
名にたかきなからの橋のなかれの
よるのうき袖は涙とゝもにくちぬと
歌しまと
水ちるさ萬たちもよ袖をもて
面影はまくもの橋とかくらん　藤原基俊
藤原忠通
うき雲のいさよふよひの通ひ
なきひの橋しらへるれはなかれ
左大弁親宗
手向してうき橋のうち渡る
たのむことなきとこたへ渡らん
二重橋萬橋と云ふ所もありけり
藤原右衛門督
杉のかゝるを秋もたかき萬の泊りに
むかしをこそ思ふ夢のあとなる

百くさのめしかる時花ちるらしいへのかと
てよもなき秋ふかきかな

崇徳院御製

五月雨はいふたならぬのしのすゝき
月まちまてし猶もまちあへぬ秋
たいまつまて

輔仁親王

きえぬるまてしはしおもひみやまやるるへき
くもりなきいはまの夜のまにいりはてもせ

藤原清輔 時百首歌よみ侍りける

時鳥五月夜のみかとそしよりあかす

藤原基俊

いとしくさつつのいとさまのいけをかは
みかのせもくるしさなりて秋のなかき

源俊頼朝臣

おほつかなかりはのいりの雨そゝく
おもふころや五月のみちのおもはるへき

中院入道右大臣中将に侍りける時歌合し侍りけるに

今日そしるまつけふ五月雨のころにふれは

藤原顕仲朝臣

五月あめにあさゝはぬまの花かつみ

あふみのまゝに[illegible]

崇徳院に百首歌たてまつりける時よめる

左京大夫顕輔

五月雨の[illegible]

しつ屋の小萱ハ[illegible]やしぬらん

前参議教長

[illegible]

[illegible]

皇太后宮大夫俊成

五月雨ハたく藻のけふりうちしめり

しほたれまさるすまのうら人

藤原清輔朝臣

時も雨[illegible]

[illegible]五月雨の空

待賢門院安藝

五月雨ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]五月雨の[illegible]

[illegible]

五月雨にもえ人の庭まちもかくれて
くもまいなきのさへわたるかな
旅泊五月雨といふことをよめる　　源仲正
五月雨はいと海のかつつき袖やなほ
あまのさへつゝとけのさしまちもぬれ
月前郭公といふことをよめる　　賀茂成保
さく人まちかね雲のたえまに月のかけ
しはしもみえてなくほとゝきす
夕立郭公といふことをよめる　　修理大夫資賢
ほとゝきすなくやさつきのさみたれに
いまいくかへりなきわたるらん
閏四月郭公といふことをよめる
中納言師時
あふ坂の山郭公のなのみして
まちわひぬるそ袖やしほれん
後一条院の御時小弁(?)にて菩提樹院
[illegible]

郭公の鳴行雲ゐよりも
律師慶暹
伊よのさとに遠く聞えし郭公
嶋山のほとゝきすの明
瞻西上人
雲居寺の跡より雲
時鳥と山にゝほとゝきすなく
源俊頼朝臣
ちるゝのとおもひなしてきゝ
雲の人やまのはにきこえつ
堀河院御時后の宮にて閏月時鳥
とふ人もなきにねさめのほとゝ
権中納言俊忠
五月やみふかき山井にほとゝ
とよぶ声をもきゝつるかな
堀河院御時百首歌たてまつりける時郭公
かくれなきほとゝきす
大中納言道房
ともし火のみかけもかはりかくれ
さつきやみなきつるかたを見ればや
源頼実朝臣

五月やこゝろやさしくほとゝきすなくねはなか
雲のうへのみかはしのほとゝきすか
権中納言俊忠　続後撰
新古今しけりたる思ひすつる
よみ人　前参議経継
ときはなるやまし松に立てゝ
ときはなるまつのはしのこゝろ
思ひけりあさひなき
大蔵卿行宗
としふるちくさの松も消ぬまに

ふるみちのあらたなるらん
源仲正
ゆきかよふ風もなくて松の枝も
はるかにもふかきみちのほとゝきす
よそに
ちゝのはなくのはなの枝のつきかせ
しらにかけしたかなる
賀茂重保
ゆきもかはらぬ松のかけなれや
あひおひの松のみとりのさかへかな

百しきの大宮人のあそふ時
とそなれ　前内大臣通親
むかしにかへることゝも思ひしかな
見るはきのちなほしのかれらん
なさしはき　源俊頼朝臣
ありつ程小も見るにはよしかはの業平
難波ふみわきかはしてをもふて
たのしくも水のかけさひしきも
ゆしの海をもふかき蛙なくなり
小萩陽船とひる山部赤人

まれ
さもの々とをゝり　清輔朝臣
うよなや船のまうるらん
百しきのかれにに松川巻のもとまま
勢猶いけり　西行法師
たや清川見ものなかのはまのまま宮
ましこの夕小ものの行ぬき
あきしこのみちのいかわかるを
そよかり　和泉式部
見侍つかきこの世のぬしとおもひぬい

かくなからしこのもとに山人の有明の月
松下遺涼といふ心をよみ侍りける
歌　　　　　　中務卿具平親王
夏ころの花もわすれて松風を
まつの陰りそしいこそめかな
兼盛もとよりいひ侍りける
　　　　　　仁和寺後入道法親王
まそ秋も懐のかきりも夏をしらてなれしを
いかにすへきかきりもそらの秋かせは
ふるさとにきみけふ時鳥の聲

まてしはしまたよふかしとなかつるなれ
七夕のいかに待夜といふ心を
　　　　　源俊頼朝臣
たなはたのあまのかはらのいはまくら
あかつきしもはやをきてのこのゆふへの
乞巧奠の夜に七夕の心をよませ
給ひける
　　　　　崇徳院御製
七夕はあふせもなかきなかそらのかささきの
あまのかはいはまのせにうちわたれ
織女惜別の心をよみ侍りける

土御門右大臣

よもすからいかにせよとか秋風の
袖にしもおくつゆのしけきに

堀河院の御時百首の歌たてまつりける
時苅萱をよみ侍りける

大納言師頼

[illegible]は思ひみたるゝかるかやの
さかりは萩や人のこゝろなるらん

[illegible]
延久之御時[illegible]甲斐

もゝしき[illegible]草葉の[illegible]

まつ下おもふ[illegible]

雲居寺の瞻西上人の坊にて歌合
し侍りけるによめる

藤原道経

[illegible]

法印静賢

[illegible]

なかりしまて よその人はしらし次
いのちまては上葉の露をしらぬ松風
しらぬ木まもまたれ野辺のあるや

和泉式部

人もかな見せもきかせも萩の花
さく夕かけのひくらしの聲

藤原伊家

嵯峨山の竹のまをこえて見る庭の
おきての萩のまきのゆふつゆ

藤原基俊

宮城野の萩やをしかのつまならん
花さきしよりこゑのかはれる

良暹法師

あき風ははたくれなゐのこすゑまて
うつろふ萩のしたはもみちも

堀河院御時百首歌たてまつりける
時よめる

大納言師頼

秋の野の花のにしきをぬきてきて
一えたおらん袖そやつれし

法性寺入道前太政大臣の家にて歌合し侍りけるに
泉辺風といふことを
藤原清輔朝臣
おのつからすゝしくもあるか夏衣
ひもゆふくれの雨のなこりに
歌奉りける時
前大僧正慈円
[illegible]
[illegible]
題しらす
[illegible]

よみ侍りける　大炊御門右大臣
[illegible]
[illegible]
題しらす　惟明親王
山陰や岩もる清水音さえて
夏のほかなるひくらしの声
[illegible]
[illegible]
俊恵法師

岩まもる清水を宿にさなそ
ちかくもをともせてつゝ

顕昭法師

きらめくに光もしるきあか月の
月もとしみくにまさる

泉為通納言

しくれにふんゆきとなる

法眼更性

されとせまるふけゆくまゝに
もこはねりかしらまし
夜更夜月とゝくもとなる

前京極摂政太政大臣

秋ふくるつゆもむすふやおもひ
たちもとらむ塔有明の月
夏月もとふるゆ

従二位家隆

ふけ夜更行月のひかりとぬる
いのふむかつるかりのたふかき
夕暮月明とそふかへはなれ

俊恵法師

夕まくれのこるゆやよゐかつなれ

秋のよくもとしえてかう月の影

太宰大弐重家
さやけさはこゝろにしみてたえまなく月影とふらふかけにうとき

前参議教長
小萩原ふきまよふ風にちりまかふ
萩やこのよひの月よりかけはれぬ

藤原敦仲
華もちる秋とはいへと月そさやけき

顕昭法師
なかきよのあくるをまたぬ
野のほとりにこのしたかけを
おほつかなあまのさくらに
なにの秋そとはやまかせ

よみ人しらす
思ひかねなかなかにしのまゝとゝこゝろやすめ
かるかたにはたえはてゝ

極楽の
ちる

千載和歌集巻第四
秋上
秋立日よみ侍ける
侍従乳母
あききぬときゝつるからにわかやとの
をきの葉風の吹かはるらん
仁和寺二品法親王守覚家五十首歌よませ侍けるに
あさちふの露けくもあるか秋きぬと
めにはさやかにみえぬ物から
百首歌めしける時立秋の心を
よみ侍ける
待賢門院堀河
秋のくるけしきの森の下風に
たちそふ物はあはれなりけり
右大臣に侍ける時家に百首歌よませ侍けるに
皇太后宮大夫俊成
いつもきくふもとの里とおもへとも
昨日にかはる山おろしのかせ
寂蓮法師
様々にをとしもなけれは過ぬるや
荻吹風のおとろかすらん

よみ人しらす

木葉ちるほとゝはあらぬ梢を
秋風吹はちるらむの所
秋野立[illegible]とのかゝるもとやみる

賀茂重政

神なひのみむろに吹風もふよわるゝ
いろそそのつゝきをしる
[illegible]のきに[illegible]荻とをる

大弐[illegible]

[illegible]小[illegible]のゝらいさつゝ秋と

まつゆふかは木の下一つ[illegible]
秋蝉のかなしさ[illegible]

源俊頼朝臣

秋のきやうつるもよほせ妻[illegible]
立つゝしのわか袖のゆつのめ

七夕[illegible]こふるもそへ[illegible]

攝政太政大臣

たなはたの[illegible]のうもやいふらん
[illegible]しくらす涙[illegible]の宮

百首歌たてまつりし時七夕の心

ことよみける

大納言隆季

七夕のあまつひれふく秋風に
八十の船はてとはふかくとも
播河の渡はゆる時あらしあまのはゆけは
時よるみ侍るわたりもかな

二条太皇太后宮肥後

織女のあまきる霧もかはかりの
あふせもちきりわれやあまをもたすらん

前斎宮河内

しひくらして更りのまやたゝおちの

松風秋近といふことをよめる

前東宮盛國

松風は涼しく侍るかなやこゝろもゆる風
まつふかきもしはまよふのはまの松山
秋くれは秋霜にあきしはしのかたに
納涼のいもしらぬ侍りまうけれ

前参議教長

なか山たとへ松の葉の音にゆらめ
ありしはしまこゝそのまちのほと

藤原盛方朝臣

岩ねよりおつる瀧つせの白波
むすはてたえす見るも涼しのわかれ
百とせにかゝるまつる時　六月祓
ちとせともなの
　　前東宮大夫通顕卿
今日ゆきあへぬなゝせの瀬にまた
夏とみな月のいもとも哉
　　皇太后宮大夫俊成
みそきしけるやよひのゆ月
かへるもとよりもなつのなこし
六月祓といふことを

夕風に川せの水のみなつきは
まつりすることのはなを哉
権中納言実家卿　続古今一夏祓
緑林夕とふくるよ川
　　右京大夫顕輔
夕されは秋の中やしのゝめの
なしのかきてへるゝ夜の
猶このはは晴百年もなき秋のはら
よみ人
　　源保季朝臣
せうかしよなくと帰るやまき野の

もののはくもしの鎌く
野菊落葉といへる心をよみ侍る
根くれは底にとまるも露にそ
野辺にさくの柳なれわか秋
一日千歌よみ侍りける時旅の心を
てよめる
前亜相通躬卿
野にふしたる秋風のいかにも吹は
何を花人秋しとす思ひて
皇太后宮大夫俊成
夕くれ秋は野宮の旅風もみえそ

うつろふかはわかのくさのかと
たいしまて
源信卿朝臣下
なりとなくしのつかすさ萱や
かりその里の梅の枝にそ
霧はろきこそのおもかけゆけの時雨
花の色を流にわかる
梶政右大臣下
さ落くの華をいふまいつかへ
若のほとへ野辺の秋風
野花露といへる心をよみ侍る

仁和寺二品法親王

秋の野の千草わけゆく人は
萩のへまてたちとまりけり
たゝしまて

法眼道因

草まくら旅のやとりにさしもなき
野路よりもなほこそすまん

崇徳院に百首歌たてまつりける時よみ侍る

待賢門院堀川

いつもきくかせをはかせのうへにのみ
秋よくは萩のつゆ

右京権大夫

立田姫咲としの色のもとよりも
夕まくれつりわとなりて庭
まかしまて

藤原季経朝臣

秋きぬとまたれし萩の風はけさ
秋のいろにやなりにける哉

圓位法師

大方の露にはなにのなるならん
たもとにをくは涙なりけり

梅ちるをよみ侍

寂念法師

梅もふさのめくいきのとさすらふ
とまるものいかにはなかはわかれ
久方の梅すはわれさく梅の露
のまれゝてまてよこはまかする

前大納言經信

とめこしもあかぬ梅かをたつねきて
庭のへとしもすなにしりとき
色はわか宿をとふりぬはまはて

梅まてたまつるてしもの我のいくさらん
たまつ折ちよめる

小殿

庭との折ていくのもなくぬよ君の袖
梅の野にるとしもすかにそつかる
思ひ野花とつかはさゝよかる

藤原保季朝臣

いまつしもかうをもなくみまつ淺
いくみの小野のしのゝとゝ薦
梅の立つとそくよゝ人待わけるか

権中納言

夕されは小田のいなはのすゑこえて
おとつれわたる秋風そふく

前大僧正覚忠

ともしひはたすまの山にもえ(?)なから
かくれ(?)のひまにしられぬる(?)かな

月かけのすむはゝたのそらのは(?)

権大納言実家

梅(?)のよの深(?)きになれ(?)て秋風に
かのみ(?)はこそ(?)まつかれぬる

月かけのすみのほるよりあきの夜は

法性寺入道左大臣

秋の月たかねの雲のあなたにて
はれゆく空のくるゝまちけり

播川(?)波(?)晴(?)あらしのいつかたに

源俊頼朝臣

あらしの雲吹はらふあとみれは
きよみかたにも月のすみのほるなり

俊恵法師

いつくとも月はわかしのやとのまに

ともやくもあらしふくふかの山

摂政太政大臣家百首歌よみ
侍りける時月の歌とてよみ侍

有家朝臣

それならぬ月日へぬとも秋
たにまれなる山のはの月のなを
月にそなへとよるかはりゆく

左少将雅経

しはしもとちりゆくにをきつの月影
所かいくへかへるしも

皇太后宮大夫俊成家十首歌
よみ侍りける時清輔朝臣
よみはへりけるの月の歌

右大臣

月日見てなかき夜のにおそき庭の
山しのかけのうちにたなひく
権中納言俊忠
上月とよめるかけとよみは
ゐる

源俊頼朝臣

見よしこの世野原の色川萩こして

いろなる波よ月屋とゝまられ
百きる秋中の月ならすともなく
掛経よりまか
崇徳院御製
玉よする浦ハの風に空はれて
光をかはす秋の夜の月
大炊御門右大臣
とゝ更小てゝのうつれは
くもりまゆやすむこの月
皇太后宮大夫俊成
石はしる水のしら玉かすみえて
清瀧川にすめる月のかけ
藤原清輔朝臣
さよふけて夜のうし吹のをとに小霧かくれて
いつ夜のけしきもあかる月影
法性寺入道前関白太政大臣
住なれる時月毎秋友とし
いのちとなませ住里の波時ならは
源俊頼朝臣
思ふ波ゝしとしの夜あかす

もの思ふ秋のいくかへり夜半の月
題しらす　藤原基俊
山のはにまちいてしまゝのかけよりも
なかれぬるは月のいつもなるかな
藤原道経
旅のよやあまのはまへのこのまにも
月はひとりのとものまゝに
法性寺入道前太政大臣家にて月
のこゝろをよませ侍りけるによめる
大宰大弐重家
遠とこふるはなにゝかもと月清く
こゝろのまゝにかけしらぬ浦波
百首歌よみ侍りける時月
歌とてよみ侍りける
左京大夫顕輔
ゆくゑもしらぬよるの波まに
月すむ夜はのつきせぬ浦の秋
海路月といふことをよめる
俊恵法師
うきめやふかのこのよのわかれ

あかしのおきにとまれる月影

賀茂社歌合とて神
主重保よませ侍りける時よめる
歌　　　　権中納言長方
やまちかく杉のこずゑをもるかげにさしそへて
まよそにしつるあかつきのよの月
　　　　　藤原頼輔
たびねしてかくしつ川の音きこえて
月やむかしをわすれかねたるらん
湖上月といへる心をよめる

にほの海の木くてのこほりはおほうみに
みなとの月の暁わたりけり春の原
　　　　寂蓮法師
みかしのいは浅茅のしもにひろはひて
枝いま末葉のあきすやすぎし風
　　　　藤原兼宗朝臣
秋のよのあけつゝいまはたゞしらじ
わたしとものいまくしぐれ
むしの声遠といへる心をよみ侍りける
つゝゆすれ
　　　左近中将公経

さゝ浪のおもてにうつる月の音と
あかれしよりやまたのとける
立ゐこそまつゝわかるゝ暁の時わ
ふかけ　大納言経信朝臣下
更にまたこの月の絶えまのつまて杉の尾上
秋風にさそはれわたるかりかねは
ものしとものゝもしる時雨なる哉
世にふる　藤原清輔朝臣
夜半のくもにかりかねもしきて
ゆかりのおもかけ夜半の枕のわ
秋のよハかりの尾上になく鹿の
かけもくもらすにほふ月かな
田上の山のふもとの鹿の声をきゝて
よそにはかりの
源俊頼朝臣
ちゝよしのゝゆふくれは暁のまよひ
なかゝらは康頼の秋の月はる
ちとせふるはやゆくゆくゆる時雨
待賢門院堀河
ちしのゆくよゆふくれさき山里の

霧たちのまよふもとしのたつまわ
東伯康といへるはよのとみなり
新院御製
夕霧とのいへまゐりその庭まではれわたる
山田の杉くれのきもゆしの下紅葉
参議雅経卿
うきはのふかの浅まきらかすわ
芦のまかきの葉のよりの松風
俊恵法師
よみ残こめてくゐめしのせとも清見
りみのまきとかとちとしのかみわ
道因ほうし
今まとのはまそのきえかけしいのちそ
しのゝめきえそへんせとわかるそわ
参議雅経とよみけるを
寂蓮法師
宮城野の小萩ひさしにおきまよふ
さつきのゆきとそへたてゝる
しのゝめこそよかる
左京大夫脩範

さむしろの雪とふるやまさるもの
松ふく風はわきてその那しのまきれん
あくまにはつゆをき袖のつゆのまれ
左京大夫顕輔
花のゝちはいたやくらきれん
清原元輔
山里のあさゆふの花の春のたは
夜半の月のひかりのうへにまちわ
俊恵法師
よろつよのためしに花のさかりの花の色を
いのちなるつゆのまのつゆのまよ
道因法師
夕まくれ松とこもとや梅はその香に
しのゝめのきよきりのわかれや
賀茂政平
つゆやそれし秋の松かぜたえまなき
花のつまをきつや思ひのなみのよ
惟宗広言
もえいづるちがやにたかくいのる
ひとふしの雪はまさへるのみく

長覚法師

むりのまゝなくりうなるをへの
つまとひのかるゝもとの萩かな

寂蓮法師

もとよりの山田のさまの嵐風に
いふ葉まてとかはるもとの露
歌しまて かな人すす
おもひのまゝ 夜の小山田
人ちすとわもとりのわけ

源兼昌

綴延のよみひるを恨るころあよ
かへりまけれ晴むかの歌とそよ
ありけり

皇太后宮大夫俊成

ともすともよしあしのことのうきの
よろつよにそめける嫁のゝ秋風
歎しまて

道因法師

草ゝの枝もの秋よさわゆく野
乞ともの嫁あまわ月むかしの
草しきも嫁のまさかりへの枝くる

式子内親王

月ころもいつともわかぬ秋

後冷泉院御時九月十三夜宴
はべりけるによみはべりける

大宮右大臣

もろこしもよとゝやかれし弟のうしかや
ゝ夜の月みなすぐ明のうすらん
十三夜のかげとぞなれは

よみ人しらず

姨の月ことにはかなしくまて
[illegible]

月前情といへる心を

仁和寺後入道法親王

こよひこそうきぬるの秋の月かげなんとまれる
月をとのみぞやいつもうかれん

堀河院御時百首歌たてまつりける
時情といふことをよみける

大納言公実

恋しさやいかにせよとてあらはれぬるも
よめこのねざめのとにいろまさるらん

源俊頼朝臣

松風のおとするに旅ハとゝきゝに
くるもまつのわたり川のとかし
藤原基俊
たのためになりぬるてかえすられ
ちるひやちるひゝ色のうつりなむ
隣宮榛あれとしつゝあれんとまかへ
俊國法師
あれのよるもとすゝしさかれる
里ともとつゝめ草枕とは
音のうらとそなかる

藤原親盛朝臣
月影はいくよへてまとゝなる
ちらしなれよりかす士かたのうら
うきあか忠とひゝるいまとゝなゐ
頼色法師
こゝろ月のかけもしやはなもかな
雪のしらしもさしいろかな
月照草ノ露としるかへなとまへ
前京秋國
あさからぬ葉末の露にやとすこそなかる

ひかりをもわたるやよるの月のかけ
たかしまと　当家法橋都下
かくれなる世の物かたり情ある
ろ物を月ハまろも出すもを
形名利隆
ものみえぬこの物ハ行すゑも拙きハ
ちゝゆくもしても月ハ見えけり
然式言く
大空の物の月ハしちるかなしく月秋
月よ毎月ハやかりぬとも

あき物かた成道
たゝひとつしらかゝ物あ
月をのこしてあく夜をこめ
清ける入道前太政大臣の歌よき洞
夜の月といへるうきゆかしき情あり
源続利行
ゆゝか
て名月の梢のとしやまもと見
うつもやま法
谷川の水

千載和歌集巻第五

秋歌下

だいしらず　大弐三位

はるかなるもろこしまでもゆくものは
秋のねざめのこゝろなりけり

堀河院御時百首歌たてまつりける
時よめる　藤原仲実朝臣

山里はいくはしのわりこゝろしの
かくまつのひぐらしの声

崇徳院に百首歌たてまつりける時よめる
歌よみ侍りける　藤原季通朝臣

秋のよは松をはらはぬ風だにも
かなしきことのねをぞたてける

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りけ
る時家の歌合に野風といへる
心をよめる　前参河守顕昌

あはれなる野べのさゝはら(?)
やはらかにまかせてこゝろ(?)かぜのまゝにまかせて
しくしくもいかゞはせん

承暦二年内裏歌合によめる

藤原正家朝臣

松かせは秋は小野の荻原吹風に
さそはれもあへすちる木の葉哉
藤原清輔 百首歌よみ侍ける
に時よめる 二條太皇太后宮肥後
こからし山おろしの風もさむきに
妻よふしかの鳴はたえせし
大納言公実
うつろはぬ花や色かはるらん
つまよふ鹿の音ちかく聞ゆなり
おそくしらぬ 藤原仲実

従三位宗円
夕霧や梢のみえすなりゆきて
日の入かたは松の木の末
荒たる宿の草花といふ事をよませ給ける 崇徳院御製
秋の野のたてぬきしける花の海
まねくとはなきものゆへにしほるゝ
うそさむきまくらのうへに 時よみ侍ける
参議親隆
あまりて岩もるしのふぬれわたる

とませのあしくかをもろきつらん

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍
りける時家の会に残菊を
よめる　藤原基俊

としかく秋はさく明のころをといひ
菊をしひ枝てしし菊の色

月照菊花といふこゝろをよみ侍
りける　内大臣

しら菊の葉もわかねとかほやとる
花とくみえましてまさる月影

籬菊如雪といへる心をよみ侍り
ける　権大僧正行慶

ゆきならはまかきはかりはつもらしと
思ひとくにそしら菊の花

菊のうつろふをみてよめる
藤原盛方

あきをへてくものよきのまかねろうるへき
いつまてもうつろふ色をあはれとや

百首歌よみ侍りける時菊花をよめる

左京大夫顕輔

かゐのゐ

ちるまへ(?)の光とも見えは浦のへなや

月はそらはにしもくまなし(?)

宗尊親王家に百首歌よませ給ける時(?)

梢の色のとそよめる(?)

藤原季通朝臣(?)

まとゐしていりのなしわかれ色に(?)

秋のかりねもうつへと山のはの秋(?)

瞻西上人雲居寺にて結縁経

後宴歌合し侍けるに野風

の心をよめる

藤原基俊

秋はあはれとこそ[illegible]

身にしみし風のはけしくもあるや(?)

百首歌の中によめる(?)

仁和寺後入道法親王(?)

[illegible]

うつりゆく[illegible]

覚延(?)法師

むしの音の[illegible]秋

うちしくれ[illegible]秋

秋の[illegible]とそよめる

前栄之家

時鳥なくよもの木すゑ雲のうへにきこゆ
秋はゆふへのものおもひありけり

題しらす　道命法師

ねられぬる夜のいとゝや人のおもふらん

小倉のやまのもとをとてしかなくなり

宇治前太政大臣

おなしくよみ侍　小弁

君かため世とりもとくやしらん立田川

しのふもりのつれなさをとこそしらね

あはれとも世をうきたのめとそ恨ける
思ひのうちにたのむかな我も有けれ

恋えとてよみ侍　殷富門院大輔

なかなかにとはれぬるたのめしこそ待よ
しらすのうきのことはみえて記

題しらす　後徳大寺右大臣

おしこのはけなしのみわすれのみ秋ひ
月はいかにいのちありけりのはかなく

右近大将実房

庭にふるかれはのうへにさよしくれぬれと
匂ひそことはゝかはらぬものゝ色
陽寒露凝といへる心をよみ侍ける
前中納言匡房
おもひやる枝の寒気に菊のいろを
八千とせのとまりにちきりをおくつゆ
九月廿日ころのはつしくれ
権中納言通親
よふかくて菊のはなにおくしもを
人やまちけんきえぬものからとまりに

庭菊といふことを
前参議雅経
菊のうへにおくはつしものあきかせに
あらたまるはなのいろにそおきまよふ
藤原定家朝臣
しつかなる菊のしもにもかねてなる
このよにはひとをたのまぬかな
菊かをる庭にいくかもとある
法眼[illegible]
秋のよはもと摘みなれしことのはをといふ

なとりて心をくめの枕によりし歌
十首あり人のよきとせられける時よ
める歌　古今参議教長
よしともくい君のよみともくしてえん
まろしもひき人にしらるあまた
あり意趣故人といひけるをもと
仁和寺宮道法親王
あまた人をなをひいぞうれはしまを
うらみいとうさしいかる
たいしまて　源俊頼朝臣

紅葉為錦といへる心はよろしき
素意とも
かへりてよしと人のいひけるにも
ちるをまさるもの梅もとよりとひけるにも
古今はかりにも時紅葉あまた
よみつ　古萬葉和備
山ひめにちる人のかつらもとゝも
ちるをもみちをも萌をいそとしめ世
月照る萬葉といへるをまたのことも
流るまつまうる時を待をまちうる

後法師

花葉くもり月もえのまとふらん
ちりやおもちのよしの葉なかれ

嘉應二年法住寺殿の殿上の哥合
の時関路落葉といへる心をよめる

右大臣

山おろしに関つとひちるもみち葉を
いのこゝにまよはゝすせきもり

大納言実房

清見かたせきもとゝめすちりはてゝ

あしのとこそよみちもみちのみちわけ

紅葉をもらさぬ神のかきねかな

権中納言実守

あらしふくやまもとゝよりこゝのつかし

右大弁親宗

もみち葉のちらぬかけもなかりけり
かはらもおもひかけし川の

従三位頼政

ひさかたのそらにみつ葉のとも
もみち葉のちりしくにはの宿

湖上落葉といへる心をよめる

新院花園

さゝ浪や比良の高根の山おろし

紅葉をうみの物とこそ見れ

百首の歌よみ侍りける中に　落葉を

前大納言為家卿

立田山松のむらたちなかりせは

いつくのこれるもみちならまし

題しらす　前大僧正慈圓

あらしふくいくのゝ小野の松原

さく散しもみちはかりを

近衛院の御時　落葉と

いへる心を　前中納言定家卿

庵の西にもみちのちりつもれるを

秋の夜の庵によしなき神わたる

大井河にて紅葉のいかたを

俊恵法師

から紅ちるは大井の河の

もみちちるいつかはかゝる有けれ

道因法師

大井河にはいかたに流るゝ紅葉
とゝむるは岩なみしからみには
み室の山は錦の紅葉とよむ也
菅家法皇御幸下
このたひは手向山はもみちのにしき
ぬさとちりかふ名はよむちる散
紅葉の錦をよむ也
立田山は紅葉の里ハとも嵐ちる
嵐ふくみねのもみちは紅葉とも川に流
家隆
小倉山みねのもみちは
いろかはる松もしくれに
松の葉の紅葉とよむ也
貞信公
菅家御歌仲綱卿下
このぬ松ふく風の音にあ
ちらぬハいろこそかはれ
あきの紅葉といふは
権家藤云
ふるさとの庭は紅葉にこの人まち

のこしぬらんとかもわかれ
題しらす　　　　従二位家隆
ちるまても見ぬまに紅葉ゝ流ゝとも惜し
庭よし錦のしきみとそなる
崇徳院御時百首歌たてまつりける時
よみ侍れる
秋の田にもみちちりける山里をこ
源俊頼朝臣
こともたのむのかりかな
百首歌たてまつりける時紅葉の歌とて
よみ侍りける
権大納言右大将

ちりまかふ木の葉の山のふもとには
あらしや山のしくれそめぬらん
落葉浮水といへる心をよみ侍れ
ける
後三条内大臣
落てゆく錦をいかやそこすらん
みな紅葉ちるの森ぬ山川のすゑ
百首歌たてまつりける時九月尽の心をよませ
給ける
崇徳院御製
もみちはのちりのもみちをかきつめて
秋もあらしの夕日の□□□

惜る秋なくといふらん〔?〕とゞめかねつゝ

前大僧正道恵

くれぬるよりあかつきまで山里の
のこる秋のなごりをつゝしめ
雲霧の絶間絶間の夕暮に
よ九月尽の心をよみ侍りける

勝西上人

かりそめの袖わけし秋にたちかへし
かへりや来む西の山のはの月

源俊頼朝臣

明ぬともしらぬを秋風はつれなきを
野のかすみよりもかりそめける

嘉暦二年の内裏三首歌に九月尽
のこゝろを

前中納言為藤

立田山もみちの錦はこともなし
秋はいかにとよそにみるまで

正安元年百首歌の時九月尽のこゝろを

花園左大臣家小大進

とまらぬ秋はのこりともなき
よあかつき

神無月もとしふりけり
くれぬる

千載和歌集巻第六

冬哥

堀河院御時百首哥たてまつりける時
初冬のこゝろをよみ侍ける

大納言公実

吹はらふ嵐はいく秋のこのまゝに
えつゝ水のおもゝ見えん

源俊頼朝臣

あすか川秋のもみぢをなかしきて
くもはこのはのしもにふりける

藤原仲実朝臣

いくたびの水のおもかけのこりけん
まつにさくらのちりまがひけれ

百首哥めしける時初冬のこゝろをよませ
給ける　　崇徳院御製

嵐吹きもみぢ葉をさそひけん
庭のおもはしものふりにけるかな

大炊御門右大臣

たく海の芦の葉しほれこほりけり
野辺のわかなもかれてやまん

大納言経季

まつ世しかとんゆるしといはすの伊勢ぬ
こちそまて小夜のなかもとまさ

左京大夫教長

秋のよのむら雲はれて月かけの
かけしきとうかゝ見ゆるかな

花園左大臣家小大進

音羽子のうりは帯刀のもとの水よ
いはぬ人を立わしめる杜
忘れぬ袖をとふらふ

前中納言匡房

いつのまにかはの水のこほりとけぬらん
きのふのくれたのしのはるの
歎しきを

和泉式部

とやまふく嵐の風のおとはして
まさきにたちのかくれしのふ
百夕云にまたまつ秋のとよ

大納言経信

よもすからのかね
袖のあやしきものはかりしもそ
うめのかをさそふはるかせ

堀河院御時百首うたたてまつりける時
よめる
前中納言匡房
高砂の尾上のかねのおとすなり
あかつきかけてしもやおくらん
藤原基俊
[illegible]おほふなとのとものまちにゆく雲の
しろたへをかへしてならはしものおりたん
冬のよのめのみのこるとよみ侍
藤原元真
冬来ては一夜二夜を[illegible]侍[illegible]
[illegible]の霜のしたもえ[illegible]
題しらす
藤原基俊
霜をまつ枯ゆく小野の思ひなく
[illegible]ひとへつらくさむすひ[illegible]
一条院
わすれくさしけくさきなく[illegible]
まつ[illegible]のこれ[illegible]
法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時
時歌合の会に暁霜といふことを
源[illegible]

立かへりまたしもきかはわすれしな時鳥
また此の梢屋の庭のゆふくれに
山郭公よそにきゝつゝわかる時
若葉の木のかけよそにしもなく

皇太后宮大夫俊成

まつ人も待ぬ桂のさとやいかにして
ゐにしるしかれやまほとゝきすなくらん
時鳥の声よそにきゝて人伝はる

仁和寺入道法親王

末の葉もいつるとしもわかてやきこゆらむ
もしてさつき待かね山のほとゝきすは
題文時鳥といへる心をよみ侍ける

摂政右大臣

ふたつなきのかそへやことよみふる人
しらくもるゆふ月有明の月

参議雅経

宿とゝむ様ちかきものゝ子のかたなん
ときめくともわかぬしさつき待まとも
時鳥の跡とそしらめは

従三位頼政

山めくる雲の下にや成ぬらん
すそのゝはらにしくれすくなり

源師光

時雨れはくもとのふもと山は岸まつよ
くもましなくは雲かへるらん

道因法師

あらし吹ひらのたかねのねわたしに
あはれしくるゝ神無月かな

落一の浪に時雨るゝまてをそふかゝる
時雨の音

権中納言國信

なん山のしくれてわたるをとまてと
かくとまりしのたのしつくは

源俊頼朝臣

まはらなるまきのいたやにをとはして
もらぬしくれや木のはなるらん

二條太皇太后宮大貳

かみなつきへ山ひとゝひとめやまそしを
しくれつゝまゝおもかけすてて

[illegible]

秋かけしつゆ時雨しもをくかな

さよふけて秋のやまのかせのさむきに
風のをとしいかり月の影ぞさへ
さつもりまつねのこゝろをふかみて　よみ人しらず
時雨ふるよは床のまくらにぬるゝかな

山家時雨といへる心をよめる
源仲綱
音にさへたもとをぬらす時雨かな
まきの板屋の夜半のねさめに

たいしらず　紀康宗
あかつきのねさめにきけるしくれこそ
もろともに人の袖ぬらしけれ

落葉の心をよめる　藤原国経
ちりまがふこのはいとひて風をいとはぬ
ふるさとにもみぢのいろの山辺の里

中納言定頼家歌合に落葉の心をよめる
ひさかたの流れのこのはのうきわたり
中納言定頼女

秋のよはよそにしもおく野原の末枯に
思ふその松風おとむせひてやま
宇治まよまのはて侍わかぬ時鳴原

中納言長方

紀もりしたちもちの山かけ原くし
あらしふれはすくもの山のまへ
為河淡海渉時雨たえまもわかる
時れのこすのかもしれぬ

藤原仲実朝臣

尾のまゝのきりはのたなりかけ

ころのなるたなとかすくしつゝ

俊恵法師

みよし雪よはなくしそかしはらにかし嵐の
おふゆきのとまりの音にまくまかし

源俊頼朝臣

夕されはとたなひくたつとむりの
たゝとまたのもあはせられかし

傅大納言隠母か金にふかき風よ
かな

前大僧正慈鎮

作ものまとまちのつゆとまるよりはれ

ちよの山のおくにもしかそなくなる
鴨なくなる　皇太后宮大夫俊成
よ渡のさえ行有明の月かけに
かも(?)の月ふかきしものうへや
大国もし
岩ねのあしかけ秋の波なたちかへるらん
こゝろよのしまやいつかへらん
法印静賢
霜ちしきてもろこしまて井の浦をたちとむ
明やみるのとやもとをまてるらん
賀茂成保
霜の羽のうはけのしもやはらへとも
あくかたのなきさにとまるまうきね
水鳥のこゑ
源親房
ろこいやうけの霜をはらひかねん
としのみちものをもかたる鏡
影さへまたくみるかな
紫式部
水鳥を水のうへとやよそにみん
我もうきたる世をすくしつゝ

堀河院御時百首歌たてまつりける
時よみける　前中納言匡房
水鳥の玉藻の床のうきねにも
かすかにおもひいたれ秋のまとゐする
冬歌よみ侍りけるに
崇徳院御製
このごろのをしのうきねぞあはれなる
うはげの霜よしたのこほりよ
左京大夫顕輔
なにはがた入江をめぐるあしがもの
玉ものしたにこほりすらしも
承暦二年うちの歌合に
権中納言経房
をしかものうきねしけきよな〳〵は
つらゝゐてやは池の水
水鳥のうきねもいかにさむからん
道因法師
鴨のゐる入江のなみのさむけきに
をしのはがひのしもやおくらん
賀茂重保

まくもゝなしみかさの山やまのはしに
うへのさやけきもしの峰にかゝれ
月かゝるといへる心をよめる
大宮雅光
あしのやのこやもくだる月影は
こもりまつまくらのとをくすゝむる
冬月といへる心をよめる
平実重
夜をさむみとこのさえまさる水の下ゆく
ありしにもかはらぬものは月の光

水の辺とてよめる
左大弁親宗
いさゝめの月はひとつにすみながら
庭とかみし水もいくすぢかはる
小松くみはてし人のかたみとや
もとのまゝにも山井の水
前大納言下
道因法師
月かゝる山のはもなき秋の夜は
こゝろしていはゝかくるゝ月の

百首歌めしける時氷の歌とてよ
ませ給ける　崇徳院御製
つらゝゐてみかける影の見ゆるかな
まことにいまや玉川の水
皇太后宮大夫俊成
月さゆる氷のうへにあられふり
心くだくる玉川の里
閑居聞霰といへる心をよみ侍
ける　左近中将良経
さゆる夜のまきの板屋の獨ねに
こゝろくだけとあられふるなり
田家雪といへる心をよみ侍ける
大納言経信
新戸あけてみわたせはゆきふかき行界の
なみよりこえてさわたるの雪
百首歌の中に雪のうたとよませ
給ける　崇徳院御製
夜をこめて谷のとぼそに風さむみ
かねてぞしるき峰の初雪
藤原季通朝臣

さしかゝる夜半の月かけにみねのしら山の
雪のふかきをまちこそしられける

前東宮学士下

君かよは山のはまてもいくへともしらぬ
いくしらやまはいかにふりけん雪

前参議教長

雪のふるとそしるらん

前東宮坊部卿下

雪のした水の雪の下にもまたもや
あまのはらあさまにしるしたかきやま
たにしもれ

仁和寺後入道法親王

たえまなきいはせにうつる月影も
うつろふ雲のかけてこほりしき雪

参議教長

深山路はいかにふりつむ雪ならん
いそのかみふるのみやこをとはれつゝ

京極前太政大臣

今はゝや雪の下にもとけやらぬ
雪のふるとそよそにわかるゝ

治部卿通俊

もとしらていつの山みちの雪つもれとも
さつきもはいしのこよわかやまて

若菜題紹私下

むらすい生ふ下葉もうす墨を
もともつの二つおりに雪布わけてき

源信朝下

浮雲に寄せぬのけしきも猶て
こま来くみを生ふ山はかすみ
人のたつのことも一日まこころはわ
ろう時雨の消とおけるせ給ふなる

二條院清影

雪はもの岸そけいやまや陰なん
うつろえはまよふしく雲

遍照寺にて池辺雪といふ心を

よそはわかつ

仁和寺二品法親王

波のけいさえいの雪も消ずつ
かれはあまそもしはらぬ池水の
雪の消とをよるとはれなん

右大下

山里はみなとはふ雪にうつもれて
野辺とひとつにかはるかな

右近大将實房

跡もなくさ月も雪に埋れて
ふる高山路はまたひとわかぬかな
従三位頼政
あとたえてかよふ人なき深山
雪に時のみよくある有ける哉
顕昭法師
深山よりわけ入ても雪ふかみ
雪ふかくかよひし人も跡たえて
摂政右大臣
ゆきにはわれが跡ふみわけ時雨のみなと
ふみわけて時雨の
前京極関白
梅も花もみなしろたへの山里に
花にこそ松なき(?)しかはあれ
醍醐の清涼殿にて令行わかる
時よめる
深雪に軒端の竹もうちしほれ
あくまでかる(?)よめる
よみ人しらず
行方(?)は雪とともにはてにけり
西行法師
駒のあとはかつふる雪に埋れて

送るにも人やみちをまよはん

京極 坂上明兼

呉竹のおれふしことに音すなり
夜ふかきは雪やいかにつもるらん
雪のふるよをとよそにしらるゝ

藤原為季

吉野のゝ原小野の通路絶て
かよひし雪もけさはふるらん

俊恵法師

雪ふみわくる人もなき跡
松さはわたりの跡もまたれつゝ

関路雪満といふ心をよみ侍る

内大臣

梅かえにふりつむ雪はひとゝせに
ふたゝひさける花かとそみる

年の内に梅の花の咲けるを見
侍りてよめる

天台座主明快

山里のかきねの梅はいまもなほ
のこれる冬もなにゝかはみん

雪中に鶯をといふ心をよみ侍る

なりけれ
前大納言実長
つもりしもゆきふりはてゝ雪よ
めくりくるとしの瀬ならん
こよひ井てはやまくるとしの
くれよりなんけふはかりこそ
前右近大将実光
もろともにをしむとしのくれてゆく
としもこよひをしむそかはれ
年のくれの心をよみ侍ける
相模

ありしよもまつをしむへきとしのくれかな
なかんこともありなとあれと
歳暮述懐の心をよみ侍ける
惟宗広言
くれぬるとしもまたいつもわかれをも
くふのくれのをしむへきとしのくれ
源光行
をしむともいつまて年の
ものゝふのしにかへらぬ
としのくれのかなしきは我身なりけり

かくまもなし

大律師俊宗

えとにもいさゝ雨花蒼乃ゝをて
くるしわゝるゝ乃ゝおとゝのしめる
のミ飛於ろして後大条まこ
もまみつて㐧かまかゞりて岩井
山家なさてとものふさゝは成
上人ともよ乃けにまかるゝり
よ乃九けにまかれ

民部卿範光

ありよりもさくらまゝ乃ふと
ひとりましとも
さうしもや
としみの
りふハさく
ようせて

千載和歌集巻第七

離別歌

宇佐使の餞しける所にてよみ侍
りける　前参議實宗卿
もろともにゆくへも人をしらぬかな
おもひおくるはいまの松かな

太宰大弐にまかりてくだりける時つかはしける
はべりける　前大納言公任
わかれ路はいつもなげきのたえせぬに命のきは
君はよしゆくすゑとほしとまる人は

遠き所へまかりける人のまう
できて暁かへりけるに九月尽
くる日虫の音もあはれなりければ
よめる

紫式部

鳴きよわるまがきの虫もとめがたき
秋の別れやかなしかるらむ

白河院御時百首歌奉りける時
暁別の心をよみ侍りける

大納言公実

後こせとちぎりしとこそわかれぬれ

かのこふる木もひとつにそよきよ都よ
権中納言匡房
しら雲とまかふさくらのちるよ(?)み山
ねの山ゝ夕暮のさとまつ人のなし
源俊頼朝臣
ゆふまくれよ浦風ふきしよ(?)にゆくとて
のねは雲のゆくへはてにけるとし
路のほとりにゆくゝるに経(?)か
浦まかせくるゝまに人のゆく
ふねにもよるなる
大僧正行尊
帰るさに舟(?)ほとゝきすこゝろもしらぬ
さくらいめる花(?)は人のためそかは
よそにみえぬのよもふかき月の
もとよりの雨
左京大夫顕輔
たのもしなはるもくれなはさそふ人
ちかきやのもとの秋のゆふくれ
上西門院兵衛
のちの世をたのむ(?)ものは世に
わかなもしとおもひしものを
参議為通大弐いそくのちかはる

又梅を手折てはなちける時つかはしける

藤原経衡

折て君がためとこそまもりつれ思ふ家もひとりきみ我ためにとも

匂ひ

大宰大弐資通

としごろ人の心をたのみはべりけるに

男のうつりにける後はやこなど

後ひよりそく縁時にまかりてはべれ

は時人はまつかしける

ためし

ちるとも又折て人に心をつくし別侍

なまめかしきいろのまそこまてとはまとへる

人の法会ところにはべりけるに講師にて

まよひのわかのままなれとはべるあまを

かの国の剣を別しけるほどよ

めは

天台座主源心

なましくて聞人まちえもしも思ひつる

見つるなるとたよしえよふみ家てね

流されはべりける男京にの

ちるとこそかくとこそのいかよわ女のもと

とふのはるへきに心もちて母をまとなふ
はりまのみ原在幸につかはしける
よみ人しらす
ありし世とも思ひし人はかはりけり成
かくはいかにわかはの橋のはしらは
いかのまよふる あ いとこの大進寺殿よりか
もといへる思ふことしのてはゆかりの世に
つかはしける 和泉式部
別てもなすしさくはよあしわのりは
いとこのころひのへもちやいもし

渡宋法師入唐しはへりける時のみ
はへりける 成尋法師母
志つへともこの世の思ふにの
しらくかふめ世のつとかまし
又の年はへりて思ひ時別の心もちあ
まゐる 僧都覚雅は
何ともしもよし宿はとしめきさ
あまるとしもてしつる椿の雨
立蔵人の臣まわかる人の娘なる
まそうはすまたまてらまれといさる

つきはさやかにはれけるとき〻こゝろ
かわらぬ月のかけ

西住法師

まことにいまだたづねしものを
かへるしらぬのなたひとり〻
源性盛と申せしは人ものゝうへ筆琴
あまとおもひつけるかなと土佐国にまゐる
まけの時に河原まで見送りて
ゆきの所に蒼海波の秘曲のことわりたち
ふ事あるとも人つけわたくしの語

とまりたるふたゝびあひけれは
ゆきかは　入道前太政大臣
ものそしるふるきみちを梅のかほりのいる所
あはれなる海の波よりかへりたるそ
人丸　作りわかのことのは付物
有家権中将
わすれしなよあかつき夜やおほろ月夜よ
あかやこもとのつる有明のなこり
ろうそくのみけふかわりける時別のなこり
おもう

わかれても心へたつな旅衣いくへかさなる山路なりとも

藤原定家

千載和歌集巻第八

羇旅歌

たいしらす　藤原範永朝臣

ありあけの月もし水にやとりけりこよひはこえしあふさかのせき

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍ける時家にて関路月といへる心をよみ侍ける

中納言師俊

すまのうらやなみちのとまやのまつかけに月もあかしとやまつりすみけん

月に残るといへる心をよみ侍
有家朝臣
あらしふくゐと 伊勢の海のなみかけ衣
いつもしらるゝ月の明
播磨潟浦の明石の浦ゆこき出てわたる
時雲のよとそなりける侍
中納言国信
浪の上に有明の月をみましやは
すまのせきもりよやとしまはせ
淡路潟とはるかにみえつるかけや

ららか
夜明して淡路の島の風さえて
つゝ雪ふりつゝやとりやまする
藤前太政大臣
海の輿よ舟なるほとのつゝ渚に
こまかへる
和泉式部
水のうみより思ひの侍
あかくれはともしもたてし有明
丹後国よさのうみかゝる時を見侍
赤染衛門
おほえこともやけふかゝる与謝の海の

あふ坂のせきのしみつもやこえわたる
近江国より信濃のさかひ美濃の
山こえとも有まつの山のしたくさ
はるまつの 能因法師
宮木ひくいつみのそまのひとのこゝろは
たえなみのうちよせてとはれける
大隅国の住人ともにてとかく
まて大弐に依てまかりけるに
めくみありて 津守有基
住吉のまつのみとりのかへるまて

かはらぬみよはいくよへぬらむ
天仁元年斎宮群行の時よめる
井といふ所にてよめる
斎宮甲斐
われ独りをしむのみかはいかにせむ
いとゝしくおもひかはしつゝかはるなり
法性寺入道殿下の時今の能宮
房といふ所にてよめる
源雅光
もし東のみちのくものかけはしよりみれは

千もとにまやはたえぬにかよふたか原

百首歌めしける時鴫の歌とてよませ
たまひける　崇徳院御製

あきくさも袖のあさちにおきあまる
月しもなたなほ色ふかきそら
板まのまくらもさけぬよはのつゆに
秋の扉よりかよふ扉のうち

大炊御門右大臣

華をよし野の山のさくらかな
こゝろをうつしやみぬるそらのほの

前参議通卿下

宮柱やはたの山の月かけは
なにやこよひのたけさえわたる

待賢門院堀河

花すゝきいろもにほはぬやまさとの
秋の山はふかきのみねにたなひく

同院安藝

もとの葉そよく夕くれのけしきかは
あきの色はしくれもまつのあらしに

皇太后宮大夫俊成

浦つたふいそのとまやのかちまくら
きゝもならはぬなみのおとかな
左大将(?)[illegible]
海原[illegible]月も[illegible]
国信卿
わたの原はるかに[illegible]
[illegible]やこよひ月とゝもにすむ明
高野[illegible]
はわりる
二條院讃岐
[illegible]
ころもたひのかりまくら[illegible]
下野国よもの[illegible]
海とひとわかれ[illegible]
前少納言師仲
あまつかせ[illegible]
松[illegible]
東路[illegible]
[illegible]
右京大夫[illegible]
[illegible]

もし来らて尤やことゝおもひまいらせ候の
海道晴女とゝいふるにて候へれ
ふ　さる人ーもと
尋てまゐらせ候はゝありけるにとゝまりけるも
ゝその松のもとにとゝまりをきて
尾張守とまりつるにありけるをきゝて志はいく
まゝゝ人の使にて歌の事ふ思ふに
わるまとゝ打ゆきてなりけるはつゝ
りけり　道因法師
月をまてはまゝつ歌にとゝめけり秋を

まゝれとおもふ人はあはれ秋と
よ給ゆふ頃の宴にとゝまりよる　祝部成仲
あゐそくのゆふさくら花をも人はしたゝかに
是よりものかはの色ひそふをまゝかわ
中院右大臣の家にて獨閑路と
いふ心をよみ侍る歌ふ
大納言實房
かくて作くともやまの人あれは
さきの清き水の音はさすらひもせ

寄衣夜雪といへる心をよみ侍り
ける　前大僧正慈円
たひねする衣もさえて小野の原しもやおくらん
さむしろに夜もすからさゆるなり
信若枕の今とそ人にみえけれ
同時詠宿時鳥といへる心をよみ
侍りける　右近大将実房
風みえ言はわすれぬるまくらの
枕よりもしらしのつゆにそ
信通朝臣
ものは草まくらの中は露さへ
さうくみえてや袖はぬれける
源仲綱
むもふて旅屋のしるしも時雨
旅のみ袖もさすらふよや
太皇太后宮小侍従
草枕おなし旅ねの床にすら
あかつきのしくれも宿はのかれけり
家よりさきさきにまうて侍りける時鳥
のもとへくみ侍りける

摂政右大臣

いつくとも春のひかりはわかなくに
春のまつ風とともにくるゝまやの

新院御製

松の葉のあらしのおとも冬されて
夕されはいろもなくてたちわたる

皇太后宮大夫俊成

ありあけの秋の田のかりほの庵のつゆ
千はやふる袖より波もしのけるかな

読人の心をよみ侍りける

仁和寺二品法親王

うちしくれいそのとまやにたえはてん
波のうけすそめぬゆきのは

詠みけるとそよみ侍りける

法眼兼覚

たひねのよふかきまくらしのひつゝ草枕
ねさめのちにもねさめてそふる

大宰権帥重家

草まくらたひねの夢にいくたひか
なれしみやこのことそかなしき

関路暁月といふことを
法眼兼覚
ゆふる有明の月もあけのこる
あやの明しきにと波のさきまり
ちそるうよみはわかるに時鳥鳴をきゝ
てしるかな
[illegible]
たびのそらすらに海の浦はのをと衣そふる
袖よりも袖の波はいのけりなし
鳴のよきのわすれかたさにもとに野もせ
かへてはわかる更にいの抄かひ
[illegible]

ゆくはわか淋しきよものあらし
登蓮法師
うきしてつゆにをもまて葦ぞまよ
思ひしのぶるうへに草まくらしも
旅ねにぞとまるかな
権律師覚弁
たびのそらすゝきは下葉の袖まつる
きく淋しさかうわてふ夜の中山
旅出のあとの誰の今に旅ね
しるとぞよかる
藤原資忠

旅ねするいほりをすくるむら時雨
なこりまてこそ袖はぬれけれ
旅の心をよみ侍ける
大中臣親守
思ひやる都もとほくなりぬらん旅ねの夢にみえもこそすれ
ねさめにもまつとしもえぬ人ことにわかれ
山ふかみあかすみやまをこえてこそ國にはわかれ
旅のうたよみ侍ける
平康頼
かくしつゝいつまてふる里のそらをすきて
たつもとのしらぬたひねのかりまくら
たつまつるあかつきの小路はよるまちかねて
おやいつくよみへのしらぬ風
題しらす
都をはいつしかとのみいそきしに
僧都範雅
東路のしらぬ山にもやすらはん
あるゝにはいりえの川の関
前参議経盛
かはりゆくよはのあらしに旅ね
しらとりの
前大納言
岩根ふみ峯のしけみをわけゆけは
前中納言
まつ人もなき旅のそらにまよひぬる

千載和歌集巻第九

哀傷歌

花のさかりに[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

中務卿具平親王

春ことに[illegible]花も[illegible]
[illegible]

返し　前大納言公任

[illegible]
[illegible]

[illegible]中納言の[illegible]
侍ける

右兵衛督[illegible]

[illegible]人の[illegible]
[illegible]の桜も[illegible]
[illegible]母[illegible]

よみける

和泉式部

おしまるゝなみたにかけはとまらなん
たゝこのくれはかりこそおしけれ
松のはひ侍りけるをとりて見侍りけるに
かるにいのあるを形見にしてあまた侍を
らかくてありきぬとよそにへたて女房
のかへる

前東宮亮經輔

くちもせぬ人のかたみや松の木のもとにとまりて
おもひこそすれいつとなくとも
又いひくるまて待ちけるほと

かへしてよつらくはわかなくとも
中将道信朝臣
里おもふわかれはかゝる

藤原義孝

思ひあまりいつくをとひて秋は
ゆくもしらすこゝろのうちに
世のなかのみちもかはらぬよの

華山院御製

うつゝとも夢ともしらぬみのうきは
いはれのもとをいつとしらまし

一條院の御時せんさいにうへさせ給ひける
のゝ院の菊をたてまつりけるに
源兼澄
もゝしきにうつろひわたるきくのはなかくよ
こゝろのはなやしらみにしなかたまし
さらしのまてりけるかくなかるそ
よみ侍
道命法師
ちるもしらすおもへとさためなくなれは
ひとりのみやまとしのふ[illegible]
花山院のくにのみかとせきのよみ人
はなりける
為家長女
老ぬともいのちのあまりのかきりをは
君のみやまつかひのかはりにけるかな
後一條院うまれさせ給ひての七日
のよるのゆふよりかはらせ給へりける
上東門院
一とせも君かためにあらんほとにこそ
このよの月はいかにかよりもしかはらし
枇杷殿皇太后宮のうまれさせ給ひける時に
ものいひとかはすとてかくなん

かくれもとの人舞給て後源頼定一品
親王と申けるか桃園殿の侍りけるに
くにゝ成ける時清原の信昌か
よもなきとの悲しきの侍りけるを見
てよみ侍りける　　弁乳母
あやめ草たのむ袂のしつくにはかけて
かゝるなみたの根かとはらはかけつ
返し　　江侍従
ちぬともあやめ草ハ有なめり
よとゝいぬいれぬ袂やいかゝ
大納言長家大納言忠家侍りけるを
めのと侍ける人の許に
かゝる比清経まとゐまつりて侍わ
けるまつりしける
大貳三位
あけまきをいりいれし心にそめよ
なきもとつみといはぬ人をまつの
返し
大納言長家
なみなき物にこゝろいりいれて
なくゝゝもといはぬそとかきりを

一條院くらゐにおはしましける年秋
月をみてよみはべりける
承香殿女御
大かたはよとやくうらめの月かけは
あきらくもしめ人はかなせや
後一條院四月よりおほせ給ひける
年の九月よりまつりことはしめ給ひける
めす九日のつとめのとくに上東門院
よりまゐらせ給ひける日人にかはりて　前中納言
よみ侍りける

あきらけきいはひにもつきせぬ
秋のかすをもちのよにかはるまてわか
同年の冬清涼殿大嘗会大まつり
こと月つこもりまで大納言長家二条
院の一品内親王とかはしける時まで
てはわたらにかへしはへりける
前中納言宣方
うきあけはさくやのみにしとせか
あきらくもかへしませしまつりて
あそ
大納言長家

の野をハいとゝへまそる別かな
ことしもしるやまとのかまと思へハ
左近中将まさきよかりける人の
なれにけるをとおもやいつなとはや
こよひまてのみのきこしとおもふ
よつにかゝ　恵慶法師
かゝるのよりそとさへハあかし
つゐなれハしはし屋のかきくれまさる
恒徳公のくれはわてしのつきにて
はわりける　藤原ゝのまにはかなき

かなくもふけゆくまゝの
右京道信朝臣
金ちぬて君すみいゆるしのなみた見
むしのねいとゝしくしのりまさりけり
上東門院のまゝにはけるにはかなけるに
条院の御ことともかなしきにはなみ
ふかきみやまのかりのあはれ
赤染衛門
つねよりもまたぬれそひしたもとかな
むかしをかけておちしなみたに

清からし　　　　上東門院

うきとも思ひしくるまにゝ
見しよの春ちる枝をきみなるらん
藤原はわけつ給ふ京明る女房まかりけるに
めともすへしとおきのまつまつはつこゝろか
まてよ春
都へとおもふてつゆのまよひを
源重基卿
たまひしともなりけん
菊人はわかたのむや時雨のしのはなわ
いつはる秋のあはれこともとまりなむ

かゝるのときもてつりけり
平雅康
ゆくらともはかなくもとはからん
しかとせよ
人ならぬ
大僧正行尊
はへりしくに
まつりける
藤原北房
華とかゝるへはむとちらそしはわ
あはれしちとやとへん
もみちも風にまかせつとさかん
後こゝにつきとやかて諫言の
前中納言匡房
はかなき代れり

かつくもしらす墨くめの秋の衣
くさもきもいろかはるともしらぬかな
かはりにかはりける時大納言忠家卿
まかりわたりける後中納言国信のもとに
よ侍りける時五月五日せうそこして
侍りけるついてにそへてつかはしける
権中納言俊忠
墨くめのたもとにかくるねをみても
あやめもしらぬなみたなりけり
返し
中納言国信

あやめ草うきねをみてもしらぬ袖のうへ
くちぬる袖をおもひやるかな
女王におくれて歎侍けるころ
のもとよりとふらひにつかはし
ける
皇后宮肥後
おもひやるこゝろもそらにうちしほれ
しのふもしらぬ袖のしつくか
贈皇后宮かくれ給にける後
秋のくれつかたとふらひにまかりて侍ける
よゐにかけてよみ侍ける

よめる

あすのかつおもひもかけぬいはしろの
嫁とつかへんよの明けむ
ありせはや里かる女もまつわかる暁
月をみしよな

藤原有信朝臣

もろともに有明の月を見し人の
いのちあるやとよ見とゝまるらん

人のわさとしける導師の諷誦文
よみ人はわかるゝまゝかたのほかは見え

はかりける

慶範法師

うきよにはのみのなかもすみえて
ありなしのわかれはいかにおもひしるらん

待賢門院のうせさせ給ひて後はて隠
いくたひもうちかへしつゝ侍りける
わたしけるのをよみける

皇嘉門院出雲

のちのよをまつへきかたも人いかにとはれとも
なき人をたのむこゝろもかなしのみ
御花

上西門院兵衛

たちまくらよわのうらみのうきねにも
なみのしもおくとまもなきわかれ
のこゝろをみつかはしもまたことく
あはれなるつきのためにそ人の
よそひにはしけくかなしき

静厳法師(?)

いまはとてもとこふわけしや思ひのまゝに
あかつきのそらのうきわかれとて
暁よはのかきの時上人のまくらにて
わかるゝ黒染の袖もとはれて

かはらにつかはしけるなかにとよ
みなにも

天台座主慈鎮(?)

もろ人のみなぬれぬへき衣ても
ぬれなやみのこゝろもなくて
松のまきたつ時なる秋霧の郭(?)
ものゝあはれをそふるよすかに
なかめける

皇太后宮大夫(?)

こよひわもこゝろありきの雨郭公
さそひのやまのかせもおもひは(?)

参議雅経(?)

ふるさとの雨にまつかせにはわかるゝを

宣旨よみてめすき侍りしよみ侍る

久我内大臣

いそしまくやかてしらるるも

あさ衣のみあさくしも月の前

中納言伊実六条家にてまゐりあひて

くもゐも橋のわたりもそこに九条堂

まゐりて侍りけるに秋の花をはさはわ

よる

大宮前太政大臣

たくひなき夜こそかへりと寛平の

かしはみつるかはのしつくへ

大納言公実のもとにて侍りて七夕の心を

乃日よみ侍りける

花園左大臣

のこりなくあけぬるよはのわかれ

別はいまいかにせまし秋もとし

大納言経信右大臣家にて七月

七日母の三位のもとにせうそくの次

よみつかはしける

権大納言実家

七夕に夏ゐのとりなせす斗き

神もしらぬよにたえてのわかれ

なし　三位

さつきの葉のかなきかたなくなかりし
めきぬよつらぬあつまといやきをせ
侍費内候つきともおもそ候法
則候よそ晴なるの物なりわらなる

仁和寺候道法親王

ありよふこもしあまとい?はまや?
たまとえつしたとひえたまま
二条院のつきとおもて??ま
??かる

清水澄墨

つまかめし君のみ?そとりふかく
?ろ?だひと?との?
大殿法内左大臣??うまで?の?
?の?宮?付わる私記とも?
りゝもとかくそよとはわる

右大下

もとしへもとくそのことも?葉をとかへる?
まるよみのかなみのなのうき
母の二位局??候?付?る

民部卿範?

とをゝ山おもひ入るさへつらき秋
なとしもやこけの下にくちなん
母の服に侍りける頃文紀伊二位
おほつかなよりいつる時よみ侍りける
前参良経殿下
みをしりてやあらはれまさるへき
なつかしき色にとまるや袖のなみた
あはれにしみてなかめつる月
忍ひて橋にかゝる女のもとにまかりける
時ありける
右京大夫季能
ことをまとひてしるへき
いはゆる夢の心かな

かゝるうきのおもひのわかるゝ
後入道法親王後入道法今
まそて月もとそふかくわかるゝ
僧都範性
入あひのかねのおとの別の
おもひし秋やわかれし月
ありやのかほのこゝろの下
ねをきくものゝあはれかな
いかなる
右京大夫隆範
野辺のあはれいはれのなかやはるらん

くの世もさてぬこくのさてやか
春ならは侍従とかやいひける男のいて
入河のよみをとつくりてつかはしける
よみ侍

僧都範玄

うき事はかくまておもひしりつゝ法の
くまはお色とさりけるかな
母園大夫下のもとによりけるにわ
かれをしをしへ侍りけるにいかなる
はゝ母をはなれて後のかたみに仏
侍りしかはかくなる時母にまいて侍

法印静賢

おもひきやうちもたえにしよるのまに
つきもし母をおもふことはいとゝ
わかれ母をとはわかる時母のたもち
たえもをもちはなれしかはかなしき
の庭にてまとて後又母のもとわ
かる時よめる

静縁法師

ちるはなをいまはとおもひて思ふ
もかくかくてもまくのみそなかれわ
園院園のもとの花のもとにまかりけ

つ後園にて母にわかれとゝめのこし
ろちかたになかれける時よみ侍ける
藤原親盛
まれにしと思ひしいのちのあはれ
あとをたにみくるしきよにとまる心哉
仁和寺法親王道性法親王隠れて
のちはかなくなりて後月忌の日かの墓
所にまかりてはへりけるに山よりいてゝ
にほひくるを待わかれはへりける
覚蓮法師

山のはにたにかくれし月やいまのこ
なすもしへたてゝまつのこゝろさし
中納言顕長の墓所の堂供養
の日よめるはなにとまるよりかなしき
法眼長真
年もへて見しもをもてなみなら
うたゝつらしの亡ことの里
母のわかれの時よみ侍る
顕昭
たらちねやとまりてわれをあはれまし

かゝるまゝのかゝるいのちをかけてもや勢力ハ
周行上人西信秋なれはつゆなとしけき
まきのはのうへにとまりてあはれいかなる
よなよな　圓信房私
もはらとしよをすみめくりて終の月
むとせまてよそのかはりにいさよひのきはにも
西信法師なきのわかるゝ時なき
正念にあはれなるよのかなしき事のうへ　圓信法
師のことにつゝしみの宿
兼継ともし

尽す詠はとしとせりつまたもおもひぞかし
こゝろしはのまゝいふことまことなるよ
在り　宗信法師
この世まても文字ちまきつけのなかにしに
もとめし人へ
われはのかたり

千載和歌集巻第十

賀歌

久しくおはしけるに時鳥羽殿に

をはしますよしきこしめして八條院内親王とよめる

時のうたあはせに竹遊年友といふ

心を講ぜさせ給ひけるによみ侍りける

院　　堀河御製

よろづ代とちよのかさねてなほかぎりなき呉竹や

君がよはいくひのたえずかかるらん

後三条内大臣

うゑてみる籬は竹のふしごとに

こもれるちよは君ぞかぞへん

皇太后宮大夫俊成

もゝとせと君がみかげにかげならべ

みよにいくよのすゑをかぞへん

従のあらぬかげまつのよはひを

大宮前太政大臣

君が代はあまのこやねのみことより

ちよのかげいつもひさしかれと思はや

藤河院時之春のかざしの

いつまてかまつへきよしのゝ山霞
しられける
源侍従郎下
君かよにかはらぬ色をいはひつゝ
むかしもみやこのはるのしめなりけん
圓融院御時后宮にて花契遐年とい
ふことをよませ給けるおなしことをつかう
つまつりけるによみ侍ける
藤原清輔
千とせまてちきりおきつる桜花
ことしよりのちはなにゝつけてか
為家卿
年ことにちきりおきてし花のいろを
うきよにかはらぬはるの色かな
大納言忠教
もろともにわかれゆくへき梅はさくらも
としをへてさかりは花のいろもかはらし
堀河院御時為家朝臣のいけの
花といふことをよみ侍ける
権中納言俊忠
ちるとまるちるといけの水のうへにはなのいろかな

うゑおきし人のこゝろのそのまゝに

白河院鳥羽殿におはしましける時松契
遐年といふことをよませ給ひける

源俊頼朝臣

神代のわかしのはしとやまにたてる
しめのまつのちよをかさねん

京極前太政大臣の高陽院の家の
会に池の心をよみ侍

落ちたきつ白川のやまも
こゝろにすむ人はいかにのし

二条太皇太后宮賀茂の斎とおはしける
時本院にて松枝映水といふことを
よみ侍りける　京極前太政大臣
千早振いつきの宮のありす川
まつとゝもにそかけはすむへき
藤原隆清晴るゝそらにかゝるわたる
時子日のこゝろをよみ侍

二条太皇太后宮肥後

ねのひしてもまつひくへき君なれは
千代のはしめのこのふたはは

従乃かゐるをさよゐ家

藤原基俊

あく山は尾花か袖の情君かよゝり
いくひのはをのうへとまかこゝろ

保延二年法金剛院に行幸わ
て菊契千秋といふ心をよませ
給ける時よみ侍る人々付わ侍

法性寺入道前太政大臣

君のよはちとせともさゝし月のしも萬代
きくやらうとせのさきまし神ん

華園左大臣

尾花萬代よもあまへゝまたおれとて
ちとせの松をとそゝめへしとい

藤原為忠朝臣

千年振神代のことも人のこゝろを
とはましものをとさへくるもの

百とせのかしはゝ時雨の色ちとせま

崇徳院御製

きみ絵ふるな
吹風もまさりゆくをもよゐと
しいひ出しき雑か事ぞあ

二條院御時大内にまかりて
めて花有喜色といふ心をよ
ませ給ひけるによみ侍りける
右大臣
千代ふへきはしめのはるとしるきかな
かきねにとまる花のいろかな
えのものこともおもふなるへき
思ふ時院のみちをあまりぬへし
雨
二條院御製
さしてくる雲ゐのそらのかけもみな
ひかりそへつるものにそありける
百首歌よみ侍りける時の祝の歌
前大納言
うこきなき松のちとせのよはひをも
かねてそしるのしらへなりけり
崇徳院御製
松かえにすむつるのよはひ古をみても
よろつよのかすこそ祝のうちとそ見
つねにかはらぬなにとか
白河院次大臣後家
せきちひ浦のいくへつるとも

たえやのしるしといふらむ
二条院御時大嘗会の悠紀
まけのくに同西の郡のまそ
いはれて詠歌藤原範兼
安遊年とふるをとし見ゆれ
なり　　大嘗会御屏風下
いくよともしらぬ霜夜の鶴の
雲井のうちのをさまれる世に
閑院の左大臣家にて對松争
齢といへる心をよみ侍りける

入道前関白太政大臣下
ちとせふるをのへの小松うつしうゑて
よろつよまてのともとこそみめ
源通能卿下
一万代もとかきねにうつすよはひには
松そ君か年の数もたゝのまゝに
六条院御時大嘗会主基方
はわのくに下つ道郡萬歳楽
山をよめる　めくりけるをまつ
てまつる日の女房のみちよまゐりける

右大臣

山奥の音羽よりつもりつゝよのまつと世は
山しろこゝろにこゝら年ふりし所

入道前太政大臣

乃はたまり(?)ける時(?)の家にて
君かよはかきりもあらし

修理大夫顕季

君か代はみちくる汐(?)のかきりなく
ちとせをかさぬ(?)わかの浦(?)

権僧正永縁

下乃伏見乃里は
とりまうへるわかのうら(?)

賀茂成助

鶴(?)雛(?)のたつをまつしも(?)
月の(?)へ(?)とも(?)なかれ(?)
後冷泉院御時丹波守よしまさ(?)
の(?)時(?)の家のもとより

藤原孝善

君か代はいくよろつ代か(?)山の
まつの葉(?)の数(?)もつきし(?)

後一条院御時長和五年大嘗会
主基方備中国長田

山藍葉に翆しあかりめくる日を

よめる　善滋為政朝臣

ちよとのみおもひしことそさかゆる

長田村やまもと長田村の風

白河院御時承保元年大嘗

會主基方稲舂哥神田郷

よみける　右中弁匡房

みつや布の神田のいねと稲つきて

月はことにほるすましらにして

後白河院御時久壽二年大嘗會

の悠紀方風俗近江国若松

杜をよめる

宮内卿永範

白露もしもとふともときはなるへし

こゝろのあたのまつのみとりはうせす

平治元年大嘗會悠紀方風俗

方近江国志賀の浦をよめる

参議俊憲

君か代のかすにもとらんしかの浦の

ちるをのみよそにはなるゝかすもかな

同大嘗会主基方稲舂歌丹
波国長田村をよめる
刑部卿範兼
天地のきはめもしらぬなかたむら
なかた村世々のいねをとこそつかす
高倉院の御時仁安三年大嘗会
悠紀方の風俗のうた
宮内卿永範
千歳山の秋とともにさかへん君か代に
あふとこそ山のまつのもみちける

今上の御時元暦元年大嘗
会悠紀方風俗歌之神山
をよめる
前参議季経卿
常盤なる神山のまつかえもや
いく万代のさかゆへし
たかへぬる世

合裁

芸學